

昭和56年

創立20周年記念特集号

二十年のあゆみ



函館市立五稜中学校

校章・校旗

昭和37年3月6日

校章制定



1. 外形は五稜郭の城趾の五角形を形どり、地域性を重視し表現す
2. 花は五稜郭城趾の桜の花で、文化を意味し、自主
 勉励によって一層文化の発展向上を図る意味を表現す
3. 五稜を形どる線の間にある点は蕾をあらわし、これによって苦い萌え出る力が手をつなぎあい、友
 愛協調の精神を表現す

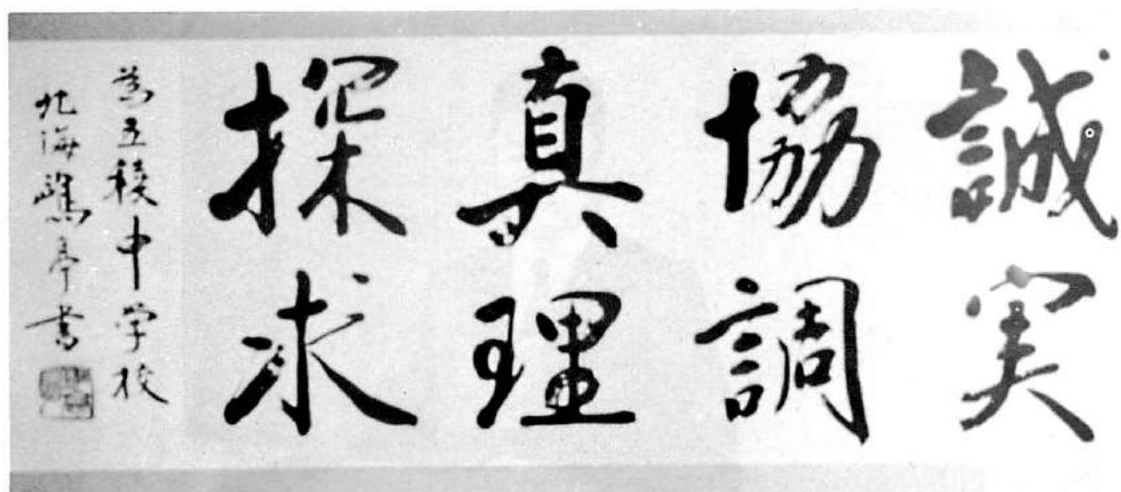
昭和38年10月10日

校旗制定

写真……………渡 辺 満 先生

絵……………一年 粕 川 礼 華

題字……………村 上 健 介 校長



校 訓



校
旗



昭和 56 年度 現在の職員



第七代 現校長 村上 健介

歴代校長



第三代校長 三ツ谷毅一
(42. 6. 1 ~ 43. 10. 10)



第二代校長 藤川 光夫
(40. 4. 1 ~ 42. 5. 25)



初代校長 沼山吉之助
(37. 4. 1 ~ 40. 3. 31)



第六代校長 齋藤 正之
(52. 4. 1 ~ 55. 3. 31)



第五代校長 金沢 浩
(48. 4. 1 ~ 52. 3. 31)



第四代校長 梶原 四郎
(43. 11. 1 ~ 48. 3. 31)



新校舎で第1回入学式 S37



「いよいよ出来るぞ」 S36



磨け磨け S37



「発展を祈願して」 S36



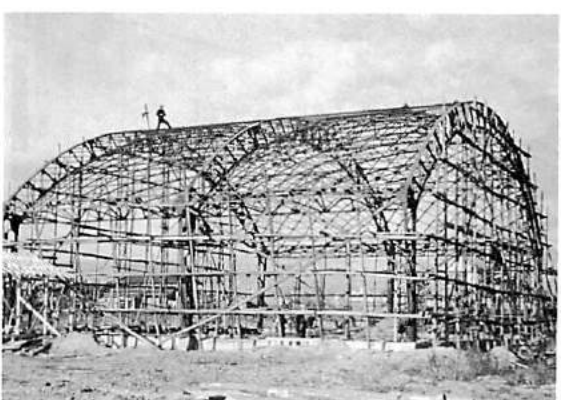
大きく育て…植樹 S37



「もうすぐだなあ〜」 S36



選手壮行会…はやく体育館がほしいなあ〜 S37



「体育館もできるぞ」 S37



地震だ！ S43



新校舎落成記念式典 S38



第8回大運動会「波」 S43



新校舎落成祝賀会 S38



第8回運動会「花」 S43



北海道道徳教育研究集会 S41



体操女子 3年連続優勝 S44



プールもできた！ S42



V・T・R技術講習会 何とまじめな顔なんだろう S 47



北海道放送教育研究大会の開会式 S 44



文化祭(職員出演) なつかしい顔が見えます S 51



女子卓球部 3年連続優勝 今も伝統が生きている S 45



避難訓練 誰だ!残っているのは S 53



避難訓練 真剣にやりなさい! S 46



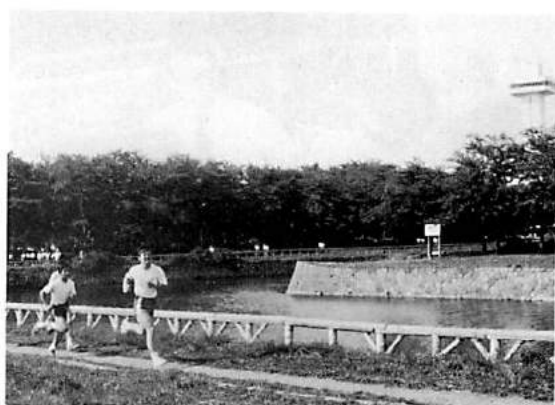
水泳部活躍 2年連続の優勝! S 54



交通安全教育 左右をよく見て、合図をして S 46



運動会(2) 鉢巻取りなんだよ S 55



校内マラソン まだだいふあるなあ! S 54



下足箱製作の先生方 S 55



全校PTA研修会 S 55



フォークダンス S 55



「さあ ゆくぞ!」 S 55



遠足「ウマイ、ウマイ」この肉、焼けてるのかな S 55



運動会(1) 髪を引っばるなる S 55



修学旅行 2 日目 (ケビンハイツにて)
私今日から肉食に変わったわ!



修学旅行 (中尊寺にて) ハイ、チーズ



修学旅行 (浄土ヶ浜にて)
ウアー、ウダデきれいだなあ!



校内陸上競技大会 大会新記録をめざして



ケナー演奏会 本場の演奏に「ウットリ」 S 55



ケナー演奏会 きれいだな! 衣装 S 55



炊事遠足 煙ばっかりあがって、さっぱり! S 55



中尊寺にて祈願 よい恋人に巡り会えますように



道中体連渡島大会（柔道）押え込一本 S 56



校内水泳大会 次回オリンピックをめざせ！ S 56



道中体連渡島大会（柔道）惜しくも、準優勝 S 56



中体連（柔道）輝く三連勝を遂げる S 56



創立20周年記念植樹祭
オンコ、松、ツツジ等 700本を植える S 56



中体連（テニス）炎天下のゲーム、イクワヨー！ S 56



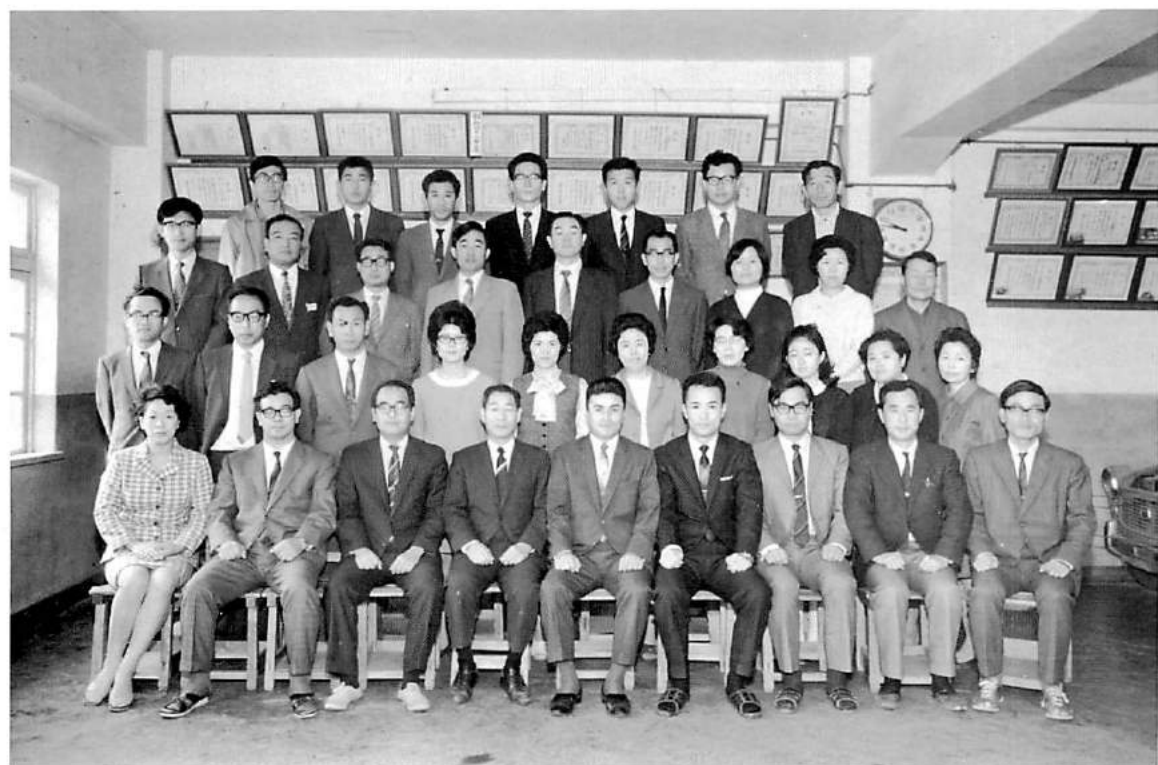
成人式を迎えた本校の姿 S 56



中体連（バスケット）さあ、しっかりガードして S 56



昭和36年度開校当時の旧職員



昭和46年度（10周年）当時の旧職員

教育目標	2
校歌	2
伝統を生かしたい	3
創立二十周年を祝して	4
母校の創立二十周年に思う	6
追想	7
創立二十周年に思う	9
誇りたい時代	10
思い出	11
回顧有情	13
輝かしい開校二十周年に寄せて	14
さらに発展を	16
あれから十年	17
学校薬剤師として	18
病弱学級（みどり学園）	19
創立二十周年を迎えて	21
旧職員方々からの寄稿	21
二昔前のネットポスト	22
函館市立中央中学校長	22
良き先輩・同僚に恵まれた五年間	23
函館市立赤川中学校長	23
成長	24

寸感	25
懐古	25
最後の授業	25
思い出の頁	25
回想	25
九年間の思い出	26
懐しい五稜中学校	26
二十周年をお祝いで	26
躍進する五稜	26
五稜を憶う	27
五稜中学校の思い出	27
サッカー部創設のころ	27
吹奏楽部設立に思う	27
想うときは	28
遠い昔	28
二十年のあゆみ	29
歴代の校長	32
旧現職員一覧	32
父母と先生の会役員	36
学校概観	38
各学年度学級数・生徒数・卒業生数	38
校内平面図	39
現職員	40

教育目標

教育基本法、道・市教育目標に基づき今日の社会ならびに校下の諸環境から「誠実・協調・真理探求」の精神と能力の啓培を基調として次の目標によって国家ならびに社会の形成者として生活し得る人材を育成する。

1. 誠実な生徒

互いに信じ合い生きるめあてを真剣に追求する意欲と実行力をもつ。

2. 協調性に富む生徒

礼儀をわきまえ互いに心を通わせ協力し豊かな情操を養う。

3. 真理を探究する生徒

自主的で意欲的な学習をめざし正しい合理的な思考をする。

4. 健康でねばり強い生徒

心身の健康に留意し気力・体力を育て合い勤労を尊重する。

5. 社会的視野の広い生徒

郷土と祖国を愛し平和と文化を尊重する。

校歌

作詞 小島 昌平
作曲 酒井 武雄

一、

ひんがしに

古城いだきて

たたなわる

五稜が丘は

若人の

息吹に満ちぬ

水上に

ふるきをたずね

新しき

光に立ちて

大いなる

力伸ばさん

二、

さくら花

しるしと仰ぎ

友がきの

堅くむすびて

うち鳴らす

自主の鐘の音

ひとすじに

まことを窮め

築きゆく

理想のすがた

ああ とわに

われら栄えあれ

伝統を生かしたい

学校長 村 上 健 介

昭和四十六年、本校の十周年にあたり記念式典や祝賀会その他各種行事を企画し、記念誌「十年のあゆみ」を発行したことが昨日のように思い出される。

昨年から五稜に二度目の勤めをし再び今年二十周年の節目にめぐり会い、本校との因縁の深さを考えさせられている。

二十年という歳月は開校当初植樹された校舎周辺の樹木が逞しく成長し太く高くおい茂っていることでも確かめられるが、振り返り方によっては非常に長くも短かくも思うものである。本校に長く在職したりあるいは学んだりしたゆかりのある人にとっては二十年の歳月はやはり二十年として歴史の重みを身に泌みて感ずるものだと思う。現在、壁はうす汚れ、屋根や窓枠などのいたみも眼につくがしし教室などの特別教室・体育館・グラウンド・プールなど完備した校舎にいるものは厳しい試練に満ちた創造の道を歩んだ創立当初の困難な取組みを忘れてはならない。

今朝校長室の書棚から十周年記念誌やアルバムを取り出し沿革史と照合しながら本校を築き上げてきた道筋を確かめ感慨を新たにしたところである。本校は、かつて畑地や湿地であった田家・白鳥町が住宅街と化し人口が急増したため昭和三十六年四月に大川中田家分教場として発足し、中央中の古い校舎に間借りして授業開始、すき間風にふるえる日もあったとか。三十六年三月まで沼山先生とご一緒に中央にいたので、その事情はよく理解できる。七月末に第一期工事着工の新校舎が十二月にできて全職員・生徒の手により移転を完了した時の喜びは如何ばかりであったろうか。畑地に逐次で地上がっていく校舎の写真がアルバムに順序よく整理されているが、その中の校舎を眺める子どもたちの期待と希望に燃えた輝いた瞳が極めて印象的である。

五稜郭を形どり、桜の花で文化、蕾で若い力を表現した校章もできた翌三十七年四月一日、五稜中学校として正式に第一歩をふみ出し沼山校長を中心に全職員・PTA一丸となって新設校の核づくりに努力され、また校舎内外の整備に全力をつくされた。凹凸のはげしいグラウンドの整備、砂場・テニスコート作りや植樹など、職員・生徒・PTAがともに汗を流し作業を通して人々の心は一つに溶け合い、協力して作り上げる喜びが満足感・充実感となり更に新たにわき上がる意欲の中で本校の礎を築いていった。生徒は主体的に学習に励みスポーツにエネルギーを燃やし中体連の優勝旗が校長室に林立した。発明工夫・プラスバンド、その他の文化活動も活発で数々の賞状・楯が残されている。

先生方の研究意欲も高く北海道道徳教育研究大会・一年において北海道放送教育研究大会を主催し、全道に五稜の名を高めその後全道・東北各地か

らの視察訪問者が絶えなかったことを覚えている。

この輝かしい本校の歴史は歴代校長の卓越した識見・指導力と、五稜に集いし優秀で意欲的な教師集団の確かな実践の積み重ねに加えて今まで卒業した四二六五名の卒業生諸君の努力の結晶に他ならない。

「校風と環境は一日にしてならず」

「歴史（伝統）が人をつくり、一方人が歴史（伝統）をつくる」といわれる。

長い間培われた伝統はただ単に受けつぐだけでなく、受けつがれ受けついだ人の中で新たに生成されていくものでなければならない。

伝統は確かに現在の生徒の教育上、人間形成に及ぼす影響は誠に大であるから、生徒育成の過程の中で如何に認識させ、如何に生かすべきかが後を受けたわたくしたちの重大な責任だと自覚している。

歳月とともに大人の意識が変わり、社会も家庭も大きな問題をはらんでいる。その中で育つ子どもの変容は著しく、十年前、二十年前と異なる部分もある。本年度から「ゆとりと充実」を目指す教育過程が実施され、続発する中学生の問題に対して心ではじまり心で終わるような、子どもの心を育てる教育の重要性が強調されている。

凡そ無から有を——新たに物事を創造する際は大変な困難があるが互いの協力と凄まじいエネルギーの爆発を期待できる。長年の工夫努力の上でも整えられ整備された中で過ごす時は子どもたちはいたずらに形を枠組と捉えその精神を吸収できないくらいがある。

シラーは「時の歩みは三重である。未来はためらいつつ近づき、現在は矢のように速く飛び去り、過去は静かに立っている」といっている。だからこそ過去の足跡を辿り評価し生かし、未来に道を求めつつ、如何なる壁があるうとも現在を充実して生きるよう育てていく過程に伝統の活用が望まれるのである。私はこの意味において本校二十年の歴史にもとづいて掲げられてきた「誠実・協調・真理探求」の校訓を柱に、知性高く、健康で思いやりのある、そして品格のある子どもを育てるのに教職の残りを捧げたいと思う。

関係諸氏の今後のご協力・ご鞭撻を切にお願いするものである。

創立二十周年を祝して

PTA会長 菊 地 富 男

創立二十周年を迎えその記念事業の一環として記念誌が刊行されますことは誠に意義深いものであり、衷心より御同慶にたえないところでござい

ます。更に本校二十年の歩みと内容とした記念誌は、その歴史を末永く後世に伝えるものであり、又、跡を継ぐ諸先生始め子供達に不屈の伝統を伝えるものと信じます。今年初めてPTAの会長に任命された私は、本校の歴史はもとより、現職の先生の顔、更に名前すら満足に知らない誠に限りですが、歴代の校長先生初め諸先生方が代々先人の学校教育発展の夢を受け継ぎ、今日まで育て上げられた並々ならぬ御苦勞に対し、ここに改めて敬意を表するものであります。創立二十周年というと、人間に例えれば丁度成人式を迎える、つまり大人の世界に仲間入りする年代であります。この事は学校をとりまく人々にお世話のなりっぱなしで育ってきた年令に過ぎない。これは本校に係わりある全員が深く認識しておく必要があります。本校も、これから先が大事なところで、学校・社会はその発展の中に在って今日なお内外ともに多難な道を歩んでおりますが、先代より受け継がれた立派な足跡を基盤とし、今後は更に飛躍して益々の発展を期すべく、PTA関係者の一致団結と相互協力のもとに一層の充実を計ってゆかねばならないと存じます。縁というか、何かの巡り合わせとでも云うか、奇しくも本校創立二十周年という一つの大きな節目の年に、PTAの会長を務めさせて頂く事に對し、心から御礼申上げると同時に、この感激は私にとって生涯忘れることの出来ないものの一つになることでしよう。さて、折角の記念誌に寄稿をゆるされたのに、何を書こうかと色々考えましたが所詮浅才な頭に浮ぶのは知れたこと、そこで思いつくまま書きたいと思しますので、枯木も山の賑わいの例えの如く、記念誌片隅にでも載せて頂ければ幸いと存じます。

五稜中の校門を始めて潜ったのは息子の入学式の日でした。三年間お世話になる学校だと思つくと、校舎を一まわりしてみたくなり、きょろきょろと教室、廊下、校庭、更に屋内運動場とのぞいて歩いた。ぎしぎしと音をたてる所、又、床面がぶわぶわする所があり、教室の壁にしても十年にわたって代々の子供達が青春時代を過ごした熱気がすすけた色となりしみたようになって残っている。又、天井を見上げると雨漏りしたのか、子供達がいたずらして水でもかけたのか、ここにもしみが地図を書いてある。正直いってきれいな学校とはいえない。息子が六年間通った小学校が近代的に設計されていて、しかも建てられてまだ年数も浅いせいもあるが、必然的に比較してしまうのが人間本能だろうか。しかし、学校にはそれぞれ異なった校風というものを備えているものであり、建物の造り、校舎を取り巻く環境等で大きく変わる。その上にある年代を経過する程に風雪に耐えて来た校舎の雄姿も、無言のうちに歴史を物語っているかのようで重みを感じられるものである。私は色々な所で色々な方々との会話の中で学校に係わるものが度々ある。それはPTAの会長をしているという事もありましょう。しかし何時の場合でも胸を張って、さわやかな気持ちで聞けるのが嬉しい。学校を見つめる世間の耳目というものは公平にしておつきびしいものである。私も聞いて自分なりに評価した時『当たらずとも遠からずだ』と考えると、同時に五稜中はすばらしい学校だ、と思うのである。

『人間は自分より劣る(幼ない)ものの中にいる時が一番楽しい』とある大学教授がいった言葉を今でも忘れない。私は先生稼業ではないが九年程前から、上は高校生、下は小学校一年生の子供を集めガキ大将をしてる一人である。ボーイスカウトがそれである。私もそうであるが、皆さん方も子供の頃経験した事だろうと考えるが、学校で習う以上にいろんな事をガキ大将、あるいは友達グループで勉強したはずである。良いことも悪いことも常に習うのは、友達からであって、学校の先生には勉強は教えて貰うけれど、人間味と言うか、人間としての中身を充実させて

ゆくのは、どちらかというと子供の仲間、先輩から教わったのではないかと考える。スカウト活動の基本となることはグループを作った仲間同志で教えたり、教えられたり仲間として協力してゆくという事を勉強することになっている。実社会での働きは学校の成績どうりではない。大きな夢を持ち、倦ゆまず精進して、いつかは何かをやり遂げる人間になる事を信じて、今日も子供達と一緒に遊ぶことを楽しみにしている私である。

母校の創立二十周年に思う

同窓会長 山崎 正 吉

五稜中学校が開校して二十周年を迎えるということは、以前から知らされていたこととはいえ、年月の流れの速さを思わずにはいられません。それは、その当時の先生方のほとんどがまだ小・中・高等学校等で元気に活躍されておられますし、定年を迎えて退職された先生も、かくしゃくとした様子でおられるからです。

開校間もないころの五稜中学校に在校し卒業した者として、この二十年を振り返ってみたいと思います。

昭和三十六年に本校は、校舎を持たない学校として出発しました。また、仮の名称こそありましたが、正式に五稜中学校となったのはもう少し後のことでした。一回目の一年目は、大川中学校と中央中学校に分かれての学校生活で、先輩から聞いた話では、『一年生全体がまとまって我々の校舎で学校生活を送る』ということがみんなの願いであったそうです。そういう中、校舎の建築は急ピッチで進められました。そのころの中学校付近は函館の新興住宅地といわれており、市営住宅や道営アパートが建って数年過ぎた位で、あちこちに畑や野原もありました。そのような、静かで落ち着いた感じの地域でした。

翌三十七年、二回生である私達が名称も五稜中学校となった新築間もない校舎で入学式を迎えることができました。といっても、そのころは体育館ができておらず、入学式の行われた場所は通し教室でした。

入学したとたんに高校受験の厳しさについて指導を受けました。戦後の第一次ベビーブームの後半に生まれた私達は、前年度の余波で受験の競争率が非常に高くなるということでした。そのころは、現在のような大学区制ではなく小学区制といって、公立の普通科で受験できるのは東高と決まっています。受験科目は九教科もあったのです。当時でさえ高校進学のため浪人する人がいたわけで、生徒の希望する進路に進ませたいという先生方の熱意はなみなみならぬものがありました。例えば、夏休みや冬休みに数日の日程で希望者に補習授業をしてくれました。また、三年も後半になると教科担任外の組にまでガリ版刷りの問題を配布し、勉強しているかどうかの口頭試問までしてくれる先生もおられたのです。生徒の方はガリ

勉強の者あり、合格確実でのんびり構えている者あり、そのころは就職する者も多く受験勉強は関係ないという者ありで様々でした。ただ、懸命に勉強しようとしている者も多かっただけ、先生方の努力が大きく実っていたように思います。

勉強以外のクラブ・部活動でも、先生方の指導と生徒の頑張りによる成果が数多くありました。陸上部や卓球部が当時の花形でしたが、それ以外のクラブ・部活動からも結果として得ることのできた優勝旗や表彰状がたびたび朝会で紹介されたのを覚えています。

楽しい思い出として記憶にあるのは、学校行事にはなかった山歩きです。先生から、あるいは生徒から「山へ行こう」と誘いあい数回近郊の山へ出かけました。学校行事の時のように前後を他のクラスにはさまれて歩くのとはちがい、歩きたいときに歩き、話したいときに話すという伸び伸びした活動を通して先生との交流が一層深まったと思います。

こうした学校生活の中、体育館、理科室や技術家庭科室が次々と建ちました。また、校歌が決まり、校旗が作られました。そして「自主勉勵・友愛協調」の校訓のもとで三年間を過ごし卒業式を迎えたのです。この年、初代校長である沼山先生が定年退職されました。

その後、創立五周年の行事があって校門が寄贈されました。この年に、男子は創立以来学生服がありました、それまで私服だった女子に標準服が決まりました。四十一年にはプールが完成し、ほぼ現在の姿の五稜中学校となりました。校訓が新しくなったのは、このころでしょうか。環境も変わっていきました。創立十周年ころには、本町周辺を新繁華街と呼ぶようになり、さらに十年たって亀田支所周辺が新しい繁華街となって昔の新興住宅地が街のまん中となりました。

この激しい環境の変化の中でも、「誠実・協調・真理探求」の校訓のもとに先生と生徒が一緒に努力するという学校であってほしいと思います。そして母校がこれからも発展し続けることを願います。

追 想

初代校長 沼 山 吉之助

創立以来二十年間の、成長の歴史を回顧して、記念誌を発行されることに対して、心からお慶び申し上げます。

昭和三十六年四月入学で、第一回卒業生の一年生のとき、生徒の将来の幸せのため市教委・父兄・先生方が考えた結果、大川中学校の三学級を中央中学校に統合したときのことです。今まで見たことのない生徒が真からのうれしい顔と、生き生きとした目の輝きを見せてくれたことが思い出されます。待望の新校舎の検定が終わり、十二月二十一日に移転式を挙行しました。この時も外山教育委員長から、仏を作って魂を入れずにならぬようにと

激励のお言葉をいただきました。この時もその輝きの目、うれしい様子、これからやるぞといったような決意が見られたのが印象的でした。

新校舎での生活態度については、きびしく、楽しい学習の中にも規律を守り、校舎の清潔、校具の破損等せぬよう、特に注意し、新一年生を迎えることが第一回生の責任であることを強調し、自覚実行させました。

校舎増築に当たっては、現場の先生の要望を設計の段階で承認を得るよう、随分市教委に足を運びました。建築の設計係が可能だと認めても、予算を握っている市教委の承認をもらわなければ青写真にのりませんから、強引と思われるほど、ねばって実現したこともありました。今考えると、失礼、申し訳ない行動でありました。五稜中学校の先生方の要望が、生徒指導上必要であり、後々の生徒、先生のためによいと信じたことは頑張ったつもりです。

机・腰掛は、三年間自分の専用の物として割当て、愛情を持って大切に使用させました。卒業の際には、破損部分は修理され、よく掃除し、きれいな机・腰掛を新一年生に引継ぐ方法を実行させました。これは成功したと思っております。

学校の名称については、色々な意見が出て田家中学校に賛成が少なく、やむなくアンケートを実施しました。結果は五稜中学校が絶対多数でした。PTA役員会を開き協議の結果、五稜中学校と名称を認可下さるよう理由を書き申請しました。後日小島教育長から電話がありまして、校名について教育委員会で審議中だが、五稜中学校の稜の字が今の当用漢字にない字を使用させることにつき委員から意見が出たので、校長は知っていたのかの質問でした。知っておりましたと答えました。教育長からそれだけでしたが、申請書に書きおとした二点を申上げました。昭和二十二年五月にすでに五稜郭中学校が認可されていること、全国的に知られている五稜郭城があります、意見として稜の字を使用することは、一般に混同させる心配があります。申請通り認可下さるようお願いしまして電話を切りました。

校章は美術の菅原先生の考案した多数の作品の中から先生・PTA役員で審査決定されたものです。菅原先生に、できたら五稜郭城と桜の花ピラを考えてほしいことをお願いしておきました。

今、二十周年を迎えるに当たり思い出されることは、優秀な先生方がよく私を助けて、父兄・先生・生徒が互いに何事にも信頼し合って、力強く前進してくれたことです。あらためてお礼と感謝を申し上げます。

諸先生の御健勝と、五稜中学校のますますの御発展を祈ります。

創立二十周年に想う

二代校長 藤 川 光 夫

市立の中学校々舎で木造校舎の最終と思われる深堀中学校創業期五年間勤務して、昭和四十年四月一日の発令で本校に着任し昭和四十二年五月、道教委学校教育課長に転任の二年間の勤務で、期間としては短かい期間でしたが校下の住民として、本校創設当時からその充実と発展について深い関心を持っていた関係もあって、多くの思い出を持っています。

本校の校是、誠実協調・真理探求の校風の樹立とそれを推進するための教育課程の編成、特に道德教育の重視とその実践、進路指導の充実について、教職員と一体となって努力したことが、いまでも強い思い出となっています。

道德教育についてはその指導過程の編成と実践の公开发表は、道南の中学校として先導的役割を果たしたものと思われ、当時の先生方は指導のための資料の収集などに一致協力して努力、公開研究会などいまでも、一人ひとりの先生方のお姿がまぶたに浮かびます。

父母の方々も、父母と教師の会の会長さんはじめ、役員の方々はもちろん、すべての父母の方々が、新設校であるがために、ということのない教育条件の整備に心していただきその熱心さに深く感銘させられたのです。

函館から札幌、伊達と生活して十五年ぶりで校下の住民として生活していますが、当時の父母の方とお会いすると自然にそのころのことが話題となって、本校は地域に根を下ろしたつよい絆を持つ学校の感を深くします。

学習や生活指導だけでなく、一人ひとりの生徒がスポーツやその他文化方面にそれぞれの持つ力を十分発揮出来るようにと、指導にあたる先生方と生徒が一体となって放課後遅くまで練習に励んでいる姿なども思い浮びます。

その成果として中体連主催の体育大会の成績なども、多く優勝または準優勝し、陸上競技などは当番校は優勝出来ないというジंकスを破って優勝という奇跡があったように思われるし、新設校としては珍らしく早く新設された学校プールで生徒たちは練習に励み、水泳競技においても優秀な成果であったことも思い出になっています。

昨今、青少年特に中学校生徒の暴力、非行について報道機関によって報道されているようにまことに憂うべき状況です。

本年春以来道内でも、札幌真駒内団地の中一少年の四才児少女の刺傷事件、釧路管内、霧多布中の校内暴力事件、札幌澄川中三男子の担任教師への暴力事件等々が多発している状況で、八月二十三日の警察庁の発表によれば本年の上半期（一―六月）の校内、家庭内暴力事件の状況から「荒れる中学生」の実態が浮き彫りにされ、特に中学生の教師に対する暴力事件は昨年の二倍になっており、ことは史上最悪になるのは必至と述べてい

ます。

この状況から、国も道も、地域ぐるみの指導体制を確立して、その健全育成を期するよう、各関係機関に通知しているのですが、青少年の健全育成が叫ばれ、それに対しての施策がなされてから相当の年月を経過しています。にもかかわらず年々深刻さを増しているのが道内のところある方は新聞紙上で次の提言をしています。『子供は親のうしろ姿を見て育つ』とし、私達、親達と大人が子供を正しく成長させて行くために必要な言動、行動をもって子供達に対応しているかを反省したい。子供が生まれたときに『五体満足で元気に育って欲しい』が唯一の願いであったのが、わが子の健康であることの感謝の気持ちを忘れ、勉強の唯一の目的が進学だと盲信し、子供達の創造性豊かな潜在能力の芽を無差別に摘みとっている。家庭・学校・社会は子ども達の進学のためではなく、子どもたちの個々に持っている能力の芽を発見し、それを育てることにある。

美しいものに素直に感動でき、愛ということばはすべての人・事に対してつかわれる言葉であることが理解でき、悲しいときは涙をもって自分を、あるいは他人を慰めることのできる子供を育てるため努力しようと呼びかけています。教育に直接する教師はいつその自覚と師表としての生活態度の確立が肝要と思われ、地域大人も、中学生の自覚と努力に期待するとともに、自分自身の健全化にこそしての生活が課題と思われるのです。

誇りたい時代

三代校長 三ツ谷 毅 一

五稜中学校での思い出を語るとなると、先ず取りあげるとは、五稜中学校の生徒諸君の目覚ましい活躍ぶりでしょう。

私が五稜中学校長を命ぜられて着任したばかりの新米校長だったころのことです。この年は新制中学校創設二十周年を記念する年でした。それでこれを記念して全市中学校陸上競技大会が千代台陸上競技場で行われたのです。五稜中学校はこの大会で堂々優勝を勝ち取ったのです。この優勝は、男子の部の優勝と、女子の部の第三位で、これを総合しての総合優勝であったのです。陸上競技は校庭の広い学校や生徒数の多い学校が有利なことは当然と思いますが、五稜中学校はそのどちらでもないのですから優勝の原動力は他の理由に求めなければなりません。即ち優勝の根元的な理由は生徒諸君の闘魂ともいえるものと、飽くことを知らない教職員の指導意欲、この二つが織りなす継続的な練習とその練習効果、そしてこの生活を周囲から温かく見まもる家庭のお父さん、お母さんの愛情、これらが一つになって大きな力を発揮できたといえましょう。私に出来ることは生徒諸君や先生方の士気の高揚をはかることだから大会の本部席に行かず終始五稜中学校の応援席で一日夏の日をうけて頑張ろうと心にきめていました。優勝旗を受けている本校選手の姿を見ながら私は胸があつくなるのをじっとおさえて立っていたのでした。

大会が終わって人かげがまばらになった競技場で選手諸君と一緒に写真をとった時には校長として、単なる校長でなく数多くの力強い生徒たち先生たちをもった校長として本当に幸福感でいっぱいでした。

そしてこの年は我が校は中体連の各種目で大活躍をしてくれ、バレーボールでは男子の優勝、体操では男子の優勝と女子の優勝、そして水上では水泳優勝、それぞれ優勝旗を持ってかえって来たのです。体育館で全校生徒と先生方が集まって優勝旗群をかこんでよろこびあい、学校を挙げての意気は本当に高らかなものでした。

このよるこびのかげには、毎日毎日クラブ活動で早朝や夕方おそくまで練習に打ちこみ指導に肝胆をくだいた汗だらけの日々が続いたのです。そしてその成果を見たのです。

しかもこの年は学習にも大きな力を示しました。高校進学も全市の平均水準を抜いた高校進出を果たしてくれたのです。努力の継続がこのような結果を生むことを学習にもスポーツにも実証してくれました。

今も目を閉じて当時を思いかえすと、先生方一人ひとりのこつこつと毎日続けていた努力や工夫の一こま一こまが浮んで来ます。そしてみんなの力で五稜中学校の黄金時代が築かれたのです。

昭和四十二年、いい時代でした。師弟同行の、同志同行の、もう一度やりたい時代でした。誇りたいメンバーでした。誇りたい時代でした。

思い出

四代校長 梶原 四郎

私が五稜中学校にお世話になっていたのは四十三年の十一月から四十八年三月までの四年五ヶ月の間であるが、この間には私の人生で初めて経験したことが非常に多いのである。その中から幾つかをあげてみよう。

第一は放送教育研究である。その頃五稜中は全道放送研究会函館大会の準備に大わらわであった。教頭を中心に全校職員が丸となって発表校としての態勢づくり、研究の推進に取り組んでいたのである。更に校内放送研究部のスタッフは市内の研究會、道南三地区の研究會の中心的存在としてその組織強化、運営と研究推進の業務をも担当し時間がいくらあっても足りないような有様であった。前任の三ッ谷校長は市内放送研の会長、全道放送研の副会長として組織や運営は勿論放送教育そのものにも深い理解と高い識見を持っておられたのであるが、私は放送研には本校にきてはじめて関係することになったので、組織のことも研究内容のことも全く第一歩からの勉強であった。いくら三ッ谷先生の敷かれた路線に乗っていくだ

けでよいといわれても、あまりにもわからないことが多すぎて、その路線に乗ることすら困難な状態であったので校内の研究の推進にさえブレーキをかけることが多くなるしまつてあったのである。それにもかかわらず先生方は内容豊かな研究発表と授業を公開してくださったばかりでなく、学校に対するPTAの協力態勢をも全道教育界に強く印象づけ、放送教育に五稜中学校ありの声を全道に高めてくださったのである。

新しい経験の第二は野球の全道大会出場である。私が着任したとき『勉強にも強いがスポーツにも強い五稜中』を証明するようにたくさんの優勝旗が所狭しと立ち並んでいたのだが、私の在任中にそれらの大半は準優勝杯にかわってしまったのである。そんな中で野球部が地区予選を勝ち抜いて全道大会に進んだのは嬉しいことであった。しかしこのとき遠征というものは驚く程費用のかかるものだということ、そしてその資金集めは予想していたより大変なことであるということを目にしてみても知らされたのである。

第三は慣例の変革である。創立（開校）の記念行事は市内各校とも五年毎にPTAの協力を得て式典、記念行事、祝賀会を盛大に行い、更に記念の設備を残すのが慣例となっていたのであるが、本校十周年の記念行事については教育委員会の指導の下に『少ない費用で最も有意義な記念行事』をどう組み立てるか、の問題に取り組んだのである。もう一つは、それまで校庭で父兄と共に楽しい一日を過ごしていた運動会を中学生にふさわしい競技会に改めようかという問題であった。両者とも慣例として定着し地域感情も承認していた行事の改変であり、会議では甲論乙駁の白熱した討論が続けられたのであるが、その時の先生方の上気した顔は今でも思い出される程強い印象として残っている。

第四の経験はプール管理であった。プールで泳がせてもらったのは最も楽しい思い出の一つである。特に夏休み中は、天気がいれば毎日泳がせてもらい、生徒といっしょに競泳したりもぐったり、ほんとうに裸の付き合いで子どもたちと仲よしになれたのは嬉しいことであった。その一方でプール管理は先生方にとって大変な仕事であることをしみじみ感じさせられたのである。プール開き前の清掃、注水、循環装置の点検整備、毎日の水質管理、夏休み中の水泳指導と健康管理、そしてそれらの事前計画、加えて機械の故障箇所を発見できない修繕屋さんへの対応等々にかけられる労力は大変なものである。更に驚いたことにはむし暑い夏の真夜中に無断で入りこんで泳いでいる若い男女のグループがいるとか（これは渡り板を梯子がわりにして入ったらしい）日中入れないはずのプールサイドで、どこからもぐり込んだのか三才ぐらいの坊やが一人で遊んでいた（草にかくれて見えなかったフェンスの下の地面との隙間からもぐり込んだのである）とか、予想もしない事柄に出会ったものである。

以上いくつかの思い出を綴ったのであるが、私の五稜中在任中最もショッキングな事件は、中三の女の子の交通事故であった。心から御冥福を祈ります。

私の校長としての在任校は三校だけである。各校ともそれぞれに特色があったが、新しい経験を最も多くさせてくれたのは五稜中であつたように思う。皆さん有難うございました。

回顧有情

五代校長 金 沢 浩

五稜中学校が、創立二十周年を迎えられたことに對して、まずお祝いを申し上げます。

年月を重ねるにつれて、二十年にも三十年にもなるのは当然のことですが、句切りのいい時期に、過去を顧み、現在に到る歴史や伝統を思い、さらに未来への歩みを語り合い、より確かなものにしていくことができれば、それはまた、意義のあることでしょう。

私は、昭和四十八年四月から四年間、五稜中に勤務させていただきました。教職に就いて以来、市内の学校だけの勤務でしたから、昭和四十二年四月から六年間は渡島におりました。当時、人事異動の内示を受けた時は、八雲中学校にいましたが「五稜中学校」と聞いて、俄かに緊張を覚えました。わが郷土函館に戻って、校長としての五年間の学校経営の経験を生かし、さらに研究を続けながら、五稜中の生徒のため、学校の充実発展のために努力しようと思いました。

着任に当たっては、生徒諸君も教職員の皆さんも、笑顔と立派なマナーで快く迎えてくれたことが、第一印象として嬉しく感じられたことを、今でも思い出します。

校地はさして広くはないものの、校舎は鉄筋コンクリート造りで、五稜中創設の一年前の昭和三十五年に、深堀中が的場中分教場として建てられた時には、まだ木造でしたからそれに比べると幸いだったと思います。校舎の構造、教室の配置もきちんとしていて、プールまで設置されていたのですから、恵まれた環境・条件を備えた学校だと言えます。

しかし、その後校地や校舎・施設等の管理上多少の問題もあって、対策に困ることもありました。例えば、市勢の発展に伴い、学校の周囲にも住宅が建ち並び、校地と隣接私有地との境界がさだかでない所もあって、トラブルが起きたり、部活動のボールが住宅やアパートの窓へ飛んでいくなど、気を遣うばかりでなく、予算上思うように改善が進まない状態が続いたりしました。また、かまぼこ型の体育館の天井の鉄骨の上に張ったボードに投げ上げられたボールが当たって、破れたりずれたりして、卒業式が近いのに業者は来ないし、ついに担当の先生が鉄骨を伝わって天井に上がるといふ危険なこともあって、ハラハラしたこともありました。体育館側壁の窓も斜めになっていたので、ガラスの修理が面倒でしたし、毎週月曜の全校朝会での講話にも、マイクの声が反響し合って、話にくいし聞きにくい構造で、いつも気がかりだったことが思い出されます。

教育活動の上では、「誠実・協調・真理探求」の校訓のもと、全校生徒はよく学習に、運動に精励して、他校にひけを取らない成績を挙げていま

した。先生方も皆熱心で、学習指導に、校内研究に実践的研修を進めていました。他校に比べて充実していたのはO・H・PやTV等の視聴覚機器を十分駆使しての授業が特色であったと思います。

こうした学校教育を支える父母の皆さんも、それぞれの家庭教育を基盤に、非常に協力的で、PTA活動もそうした方向で進められていましたから、学校として幸せなことでした。毎年の学校行事に寄せられる父母の皆さんの関心や好意は、おおいに励みになったわけで、特に当時の母の会の毎月の講座研修や文化祭での食堂やバザーの開催は、母と子と教師の触れ合いを深める和やかな催しでしたし、純益は生徒の学習に役立つようにと、O・H・Pその他の購入に使わせていただいたりで、ありがたかったものでした。

さて、思い出すままに書いてきましたが、当時から時代も移り、中学校教育も教育界そのものも変動してきているのも事実ですが、変えるべきものは変えても、変えるべからざるものは、時代や社会を超えて、人間尊重の教育を図ることにあると思いますし、知性と愛情を身につけた若い人達が輩出して、この社会をよりよくしていくてくれることを願わずにはいられない昨今です。

五稜中草創当時から伝統と校風を思い、その脈々たる精神を継承して、帰属意識と誇りと喜びを感じつつ努力する教職員・生徒であってこそ、五稜中全体の高まりにつながることであり、今後のますますのご発展を期待申し上げます次第です。

輝かしい開校二十周年に寄せて

六代校長 齋 藤 正 之

五稜中学校が開校二十周年を迎えたことを心からお祝い申し上げます。私には、まるで息子が成人式を迎えたような気持で感慨ひとしおのものがござります。想えば五稜中学校との出会いは去る昭和四十二年四月にさかのぼります。以来松前町に転出するまでの三年間と、戸倉中学校から転動して来ましたが昭和五十二年四月より昭和五十五年三月までの三年間、計六年間勤めさせていただきました。殊に後の三年間は私の教職生活の最終の時期であっただけに忘れることができない数々の思い出が眼前を去来いたします。七年の空白期間において五稜中学校に戻ってみると懐しい玄関、校舎、グラウンド、プールなど以前と変わらぬ姿で私を迎えてくれました。職員の方達は、さすがに転出入が激しく、全職員中以前から引き続いておられたのは、わずかに木村用務員さんだけでしたが先生方の何人かは市内のどこかの中学校で机を並べた仲でしたから新しい学校に着任したというよりも懐かしい我が家に戻ったというホッとした？気持でした。教職員の皆さん方は三年間で何人かの転出入はありましたが、小林、辻岡教頭さんをはじめ諸先生方、事務室、用務員室の皆さん、そして給食のおばさん、土・日パートのおじさん方、とにかく全職員が五稜中学校をこよなく愛し、

和気あいあいの中にお互いの守備範囲を守り責任を持って積極的に行動するという極めて充実した生甲斐のある三年間でした。又全職員が同一歩調でキメ細やかな親身の指導をされた結果、今大きな社会問題になっている校内暴力なども皆無で、生徒達も明るく素直でした。この事からも教育では教える者と、それを受ける者との信頼関係がいかに大切かということをおわかりいただけたと思います。

全職員には教科は勿論ですが、生活指導面では特にご苦労をいただきました。なかでも毛間内先生を中心とする生徒指導部担当の先生方のご努力に対しては今も頭が下がる思いでございます。一方学校を陰に陽にバックアップしてくださったPTAの石畑会長さんはじめ会員の皆さん、そして校下地域のご努力、ご支援も大変なものでした。このように多くの方々の温かいお力添えのお陰で教職生活の最終ラウンドをどうにか無事に過ごさせていただいた私は果報者であり、心から『ありがたい』という気持ちでいっぱいでございます。

さてふりかえりますと幾多の懐かしい思い出が浮かびますが、紙面の関係上そのうちの一、二を書いてみます。

やはり純粋な生徒達の文化、体育両面での真しな活躍ぶりが忘れられません。校長室には常時優勝旗が何本か置かれてありましたし、廊下には数多くのカップ、楯、トロフィー、額などが所狭しと飾られていました。又、個人賞としても、どれだけ多くの賞を手渡したことでしょう。それぞれ生涯の良い思い出として残ることと思います。

次は、ほほえましいのを一つ。昭和五十三年の修学旅行中のことです。第一日目、水沢から中尊寺に向う弘南バスの中、私はその日四号車に乗ったのでしたが、たまたま男生徒が傍に来て話かけてきました。面白いことをいうので私は『函館に着くまでに私のアダ名を考えてほしい』という宿題を出しました。次の日私は別の車に乗ったのでその生徒は残念がっていました。休憩時に私の所へ来て『先生の宿題できたよ。殿(トノ)に決めたよ』といって缶ジュースを一本置いて行きました。学校に帰って先生方に話をしたところが最後までソレにされました。その生徒は卒業するまで何回か部屋へ遊びにきていろいろな話をしましたが、長い教職生活の中で忘れられない生徒のひとりになりました。卒業証書を受取る時の顔が今もはっきり浮かんできます。思い出は尽きませんが一応この辺で失礼させていただきます。

二十周年という輝かしい年を迎えた五稜中学が次の大きな節目に向かって限らない前進を続けられることと教職員・全校生徒の皆さん、そして校下地域の方々の健康とご多幸を心からお祈り申し上げ筆をおきます。

さらに発展を！

十代PTA会長 石 畑 克 巳

創立二十周年を心からお喜び申し上げます。

二十年という人間でいえば成人を迎える年であり、已れを飛躍させる年でもあります。

川が流れ、のどかな田園を思わせる五稜が丘に、ポツンと校舎が建ってから二十年、今では、市有数の住宅街と、副都心を抱えて、若々しく発展する街の核として、たくましく光り輝いて五稜中が建っております。まさに、これからの飛躍を約束するかのように……。

私は昭和四十七年に子どもと共に校門をくぐって以来九年間を五稜中と共に歩み続けてまいりました。

昭和四十九年度と五十年度はPTAの副会長として、昭和五十一年度から五十五年度までは会長として、子どもの幸福と地域社会の向上をめざし努力を傾けてまいりましたが、その間における体験は私の貴重な財産として、また今後の活動のエネルギーとして蓄積されており、このような機会を得たことを心より喜びと致しておるところであります。

今振り返ってみますと、私がPTA会長に在任していた五年間は、校内暴力、家庭内暴力等が大きな社会問題として提起され、また親自身も生涯教育の観点から学習機会の拡充が叫ばれる等、教育の世界は大きな変動の波を受け、PTAも、その対応を迫られておりました。

金沢・斎藤・村上各校長先生をはじめ、教職員の方々、またPTA会員がお互いに連携をもちながら、課題解決のために力を出し合って頑張ったことが、今は懐しく想い出され、そして、それが大きな成果を生みだして今の学校・地域を創造しているものと自負いたしておるところであります。よくPTAは曲がり角にきていると言われます。確かに今はその進むべき方向を模索しながら戦後の学校後援会的性格から脱却し、真のPTAの姿を探求している時点に置かれているところにあると言えるでしょう。

私も微力ながらPTA本来の姿を求めながら努力を積み重ねてまいりましたが、その中で特に印象深く脳裏に刻まれているのは、本校PTA組織の整備、充実化を図ったことです。以前本校では、PTAとは別に「母の会」が組織されており、独自に活動を行なっておりましたが、事業の競合、勢力の分散等多くの問題が内包されており、必ずしも効率の良い活動が行われてはおりませんでした。そこで種々検討を加えた上で、母の会を発展解消させ、PTA組織内に迎え、一元化された活動に持っていくわけですが、それ以後活動に一段の充実が図られたことは、その一例として強く印象に残っております。

さらに私にとって忘れ得ぬことは、昨年度、市P連の会長という重責を果たしたことです。

この中で、かねて懸案であった、市P連の専従者補助の確保、PTA地域割の再編成、道立高校の誘置等について取り組みましたが、幸いなことに、どの事項についても一応の解決をみる事が出来ました。これも五稜中という確かな基盤があったからにほかなりません。

これ迄私が行ってきたことは、五稜中が二十年前に建てられたことによって、めぐりめぐって貴重な経験として存在したわけです。

この意味からも、この地に五稜中が設置されたことを心から喜び、感謝しているものであります。そして、五稜中と五稜中PTAが今後ますます発展されていくことを心からお祈り申し上げております。

あれから十年!!

母の会長 寺 下 兼 代

真夏の太陽のキラキラと照りつけるその一日、私は中体連軟式庭球大会の審判になって出席致しました。

私の知っている五稜中は夕 とさがしました。真黒に日焼けした中にそろいのGのマークをみつめました。皆さんとても上達していてびっくりしました。

私が初めて五稜中学校でラケットをもったその頃はものめずらしがられて先生方にも気がねしながらゴロゴロ石のころがっているコートで「こうして!! ああして!!」と痛む右手をおさえながら走りまわったものでした。その五稜の生徒がいると思っただけでうれしくなって、思わず「五稜の生徒さんね、がっばってね」と声をかけてしまいました。あの頃も五稜の生徒に優勝旗をもたせてくち潮見グラウンドまででかけて行きました。「ああそれそれ、そこはこうして、ああして」と選手に口出しをして、その頃の先生方に、にらまれて首をすくめたものです。

でも昭和四十四年の時は私の次男も三年生で選手でした。とうとう五稜中は団体優勝をしましたおかげさまで、一度も体育の点数で5をもらったことのない次男は二期だけ5をもらいました。その時の嬉しかったこと、今でも忘れられません。

大会場に優勝旗がありました。そっと行ってリボンをしらべてみました。四十八年かなと思いましたが四十四年度でした。そして、考えてみましたらもう十年も子供が卒業してから経っていました。

その次男も筑波大学院を経て就職致しました。私にとって永い子育ての人生はこの秋に結婚する彼を送り出す事によりすべて終わったのだと思います。

そして私は千代台のコートで五十才をすぎてからいろいろと、手、足、腰と痛む体をだましながら、トレーニングを続けました。今年の夏を過ぎる頃ようやく痛いところもなくなり一日一日をはり切って暮しております。

その一日、中体連に出かけなつかしい阿部先生や安井先生におめにかかりました。

五稜中学の二十周年と聞き、早いものだなあと自分の年を忘れていました。

安井先生はにこにこして的中場に優勝旗をもって行きました。

阿部先生は愛息の選手姿にみとれていられたようでした。

五稜中学の二十周年、こうして生きた人々の人生の一ページを繰り返しながら一人ひとりを二十年間も送り続けたのでした。

その歴史は尊いものと思います。

より五稜中学の発展を願ひ皆様の御多幸をお祈りしてペンをおきます。

五稜中学校開校二十周年おめでとうございます。

学校薬剤師として

薬剤師 長谷川 喜 秀

昭和三十三年、学校保健法により学校薬剤師の設置が定められ、函館市が実施に踏み切った時以来今日に至るまで、本校の準職員として勤めて参りました。

併し、卒業生、在校生の皆さん、その父母の方々が果たして私の存在をどれだけの方が意識して載っていたかと思ひます時、自分の職務に対する努力が如何に乏しかったかと考えさせられます。

時々、卒業生とお話する機会があつて、私の事を話しても、通知箋に記載してあつたことすら覚えて載いてない虚しさ。これは、学校薬剤師の職務柄、直接生徒に触れる機会がないからと思われまふ。

学校医、歯科医、薬剤師は学校保健法に基づき、各々の専門的技術により従事致しますが、医・歯科医は主に対人的で年一回は検診で生徒に触れますが、薬剤師は検査対象が対物的関係上、生徒に触れることが少なく、環境検査に参りましても保健所の職員か、どこかの「おっさん」が何かをしている位に見られているのが現状のようで私共学校薬剤師としては全く残念至極です。

過日、知識人の会合の席上、私が学校薬剤師についてお話致しましたが、大多数の方々が始めて知ったと聞かされがっかり致した次第です。その原因の一つとして、私共学校薬剤師の努力もさることながら、私共の環境検査結果からその改善を当局に要望致しましても財政的な点もあり速かに改善され得ない事も要因と考えられます。

たとえて申しますと、教室内の照明環境で郊外の某小学校の教室は雨天の最悪の条件下ではありましたが、児童の机面上で照度が五〇—一〇ルクス（基準は現在二〇〇ルクス以上）のことがあり、人工照明を要望致しましたが、間もなく学校舎を改築するとの理由でしばらく放置されたこともあります。

又、教室内の室温に就きましても旧木造校舎の場合、窓枠の目張り等、学校内担当者が懸命に努力致しましても床に隙間があり、そこより吹き上げの為、如何に暖房を高めましても室内の上部だけ上がり、足元の方が低く児童がしもやけになる状態がやや続きましたが現在は鉄筋コンクリート校舎に改善されました。この件については特に財政面が強く関係致しますので早急には改築出来ないことです。

以上のように私共学校薬剤師は担当学校において学校環境衛生検査を実施し、当局に具申致しておりますが、本校の担当の私が気付かない事も多々ありますので、皆様からの叱咤激励を載きたいと考えております故、何卒御協力下さいますようお願い申し上げます。

病弱学級（みどり学園）

元五稜中学校教諭

大 福 栄 一

私が五稜郭病院の中にある病弱学級（通称五稜郭みどり学園）に勤務したのは、昭和四十五年四月でした。当時の病室、職員室、教室は昭和十年に建築されたもので、古い木造で、雨もり、すきま風に悩まされました。

翌年、病室は新築されましたが、職員室と教室は、それから数年後に新しくなりました。

学園は、柏野小学校の病弱学級と一緒に、教員はそれぞれの学校から来ていました。

小学部二学級、中学部二学級の四学級編成で、生徒数は約四十名でした。それが年々増え、翌年には中学部が一学級増え五学級となり、昭和五十四年四月には、小学部五学級、中学部三学級の八学級編制となり、生徒数も九十名を超え、教員数は小中あわせて十名となりました。しかし相変わらず教員以外の職員は一人も配置されませんでした。

病種は、殆んど結核性疾患でしたが、それがだんぜん減り、現在は長期の療養を要するネフローゼ症候群、慢性腎炎、気管支喘息、その他の疾患

ばかりになりました。

昭和五十四年四月、市立五稜中学校、柏野小学校の特殊（病弱）学級から、道立の五稜養護学校になり、職員数も、校長さんや事務長さんを含め二十名を超えました。

約八十名の患児（小・中学部）が、たくさんの先生方に囲まれ、開設の昭和三十五年当時とは比較にならない恵まれた環境の中で過ごしています。授業時間は、床上学習、教室での授業（一時間から六時間）とそれぞれの病状にあった学習形態で、昔と同じようです。

来年三月までには隣に建っていた「くるみ学園」の跡地に、二階建の立派な五稜郭養護学校の校舎が竣工の予定で、現在工事が進められています。これが出来ると生徒は病院から学校まで廊下を通して往復することになり、昭和三十五年みどり学園をつくられた、前五稜郭病院長（現市保健所長）の笹島吉平先生の善意の種が、花を咲かせ、実を結んだことになり、先生の先見の明にただただ敬服、その偉大な業績に絶大なる讃辞を贈るとともに五稜郭病院の配慮に感謝しています。

又、これまでみどり学園の子供達へ暖かいお心を示してくださった、高島さん、ヒノキオさん、平塚さん、千登勢旅館さん、お茶の宇治園さん、石田さん、教育大・大谷女子短大・保育専門学院のボランティアさん、五稜郭町会の婦人部の方々、みどり学園後援会の皆さんや、その他の方々の御厚志に対しまして、この機会をかり厚くお礼申し上げます。

（現五稜郭病院指導員）

創立二十周年を迎えて

生徒会長 小 川 芳 弘

今年で、この五稜中学校も創立二十周年を迎えることになりました。

二十年という長い年月の間には、輝かしい歴史と共に数多くの思い出が残されています。その歴史を作ったのも、この五稜中学校を卒業して行った先輩たちの、並々ならぬ努力の結晶ではないでしょうか。この二十周年を一つの区切りとして、これまで以上にこの五稜中学校が充実・発展するために生徒が今までも心を引き締め、生徒一人ひとりが物事について深く考えて、実践していかなければならないと思います。

この二十年という間には、生徒自身も随分大きく変わってきたと思います。しかし、残念ながらその大きく変わってきたという意味は、あまり良い意味ではありません。今、自分が生徒会の会長という一つの立場から生徒を考えてみると、例年のように生徒に欠けるものがあるように感じられます。その一つは、積極性が乏しいということです。例えば専門委員会の選出の時でも、自分から立候補する人が少ないということです。これは、自分からやりたくないからやらないということです。できません問題だと思っています。これだけでも積極性に欠け生徒会に無関心だということがわかると思います。

今のこの五稜中学校に必要なものは、一生懸命ということではないかと思っています。昔と今とでのちがいは、この言葉ではないかと思っています。目立ちたがり屋でもいいからみんなの先頭になって一つの物事について一生懸命やるという気持を持つことが、この学校の発展する原動力になるのではないのでしょうか。

今の世の中は、いい点数を取りさえすればいいというような考え方が非常に多いと思います。このいい点数を取ればいいという考え方と前述の無関心というものと、つながりがあるのではないのでしょうか。

人間にとって中学生時代とは、人間として生活する基盤を養ない、また、人生に対する大きな夢を膨らませる時代だと考えます。単にいい点数を取ればいいという考え方は、大切なものを見失ってしまうのではないのでしょうか。

この二十周年という時期をきっかけにし、生徒の一人ひとりが自分のことと同じように他の人のことを考え人間同志、結びつきを強くして生きて行くことが、これからのぼくらの課題ではないかと思っています。

旧職員方々からの寄稿

一昔前のネットポスト

函館市立中央中学校長 阿 部 光 房

創立二十周年、おめでとうございます。

近頃、いろんな場所で五稜中学校の卒業生諸君と出会うことが多くなりました。

乗り物の中やデパート、スキー場などでも「〇〇です、よろしく。」とよく声をかけられます。居酒屋で出会った時などは「先生、まだ退職しないんですか。」とあたりかまわず声高にズバリと聞かれます。

彼等が中学生時代、煙草を口にしない私はよく「煙草や酒は、二十才（はたち）になってからやるもんだ。」と叱りとばしていましたから、五稜郭界隈で、「一つ、どうぞ」と酒を勧められるこの頃は、五稜中学校も本当に二十才の年を迎えたんだな、と振り返って思い起こすことがたくさんあります。

五稜中学校の歴代校長先生は、謹厳で文化人を自負される方々ばかりでしたが、なぜか体育館のワンスパン獲得に日夜執念深くあたられたり、中学校初のプールを隠密裡に持ってこられたり、中体連大会の成績に熱い視線を注がれたり、はたまた学校行事には、山登りを推奨これ努めら

れるなど、体育担当教員は勿論のこと、部活動指導者ごとく走りまわらされたという感懷を抱いています。

たしかに、昭和三十六年開校して、現在規模の校舎、施設に整えられるまでには、七年余の才月が流れており、その間の歴代校長先生方が粉砕身されたご努力には敬服しています。しかし、その草創期において不満足だらけで耐えることを多く強いられた中で、誠実に、しかも粘り強く自らを鍛え、心を合わせて豊かな情操陶冶のために耐えぬいてきた生徒諸君にも、今あらためて惜しみない拍手を送りたいと思っています。

耐えるといえば、各教科それぞれに創意をこらしていました。体育の授業は、早春から秋雨が続いて使用不能になる頃まで、グラランドに出ずっぱりで走りまわり、外が凍てついてくるとプールはスケートリンクに早変わり、グラランドでは雪中体育が展開されるのでまた外に出され、生徒は年中日焼け、雪焼けで真黒になり、たくましさを増して氣力が充実し体力に自信を持っていました。

その無限の可能性を秘めた十代の身体づくりに、大きくバックアップしていたいたのが五稜中学校保健委員会でした。

この会のメンバーは、学校医で生徒達大半の生育歴をよくご存知の内科医東先生、生徒の生活指導上では、一家言をお持ちで厳しいご指摘を再三いただいた眼科医黒田先生がおいでになりました。さらに笹島先生（市保健所長）、池田先生（五稜歯科）にはPTA正・副会長という父母と医師両方の立場で適切なご助言を頂戴したことが忘れられません。

このようなお力添えで、家庭との理解を深め合いながら子供達の健康管理に、更に広く地域社会の教育力を十分領取して育った卒業生諸君は、迫力ある先輩として道内外は勿論のこと海外にまでも雄飛している昨今です。

私の退職は、もうちょっと先にのばしていただくことにして、この夏五稜中学校のテニスコートを拝借し、中二になった息子と早朝テニスを楽しみました。そこで目にしたのは、五寸角材の支柱や地上に頭をのぞかせているヒューム管の支柱受けでした。それは、開校間もない頃父兄からご寄贈いただいたて、先生方や生徒の手で作り上げたものだったのです。そんな古い二昔も前のもので、息子と汗を流すことが出来るとは考えも及ばなかったことで……感無量……。これは、五稜の先生方や生徒諸君が、先人の跡を師とせず、先人の心を師とせよ、といわれることく、日々充実した学校生活を送られていることによるものと、深く感激しているところです。

五稜中学校が創立二十年の区切りから三十年の区切りに向かって、さらに躍進されることを心から祈念いたします。

良き先輩・同僚に恵まれた五年間

函館市立赤川中学校長 田 嶋 靖 彦

私は、昭和四十二年四月から昭和四十七年三月までの五年間、活気に満ちた五稜中学校で過ごしました。人間の良き性向なのでしょうか、過ぎし日の思い出は、なにもかも美しくなつかしいものばかりです。

その当時の五稜中学校は、創設期の余韻がいんいんと残っていた時代で、教職員のだれもが伝統を築く者としての誇りを持ち、生徒を励まし、生徒とともにつくり出す喜びを感じる学校づくりに努めていた時期であったと思われまます。

この五年間に、藤川光夫校長、三ツ谷毅一校長、梶原四郎校長と、校長先生はめまぐるしく変わりました。それぞれ、校長先生としては最優秀の方々ばかりで、良き薫陶を受けることができた私は、幸せであったなあとつくづく思っています。

教育界の動向に明るく、教師として、今、手掛けなければならないものは何か、いちはやく適切に指導してくれた藤川校長先生。

私が、全校集会で校長の講話に感動し、一週間のめぐりくる日が待ち遠しかった三ツ谷校長先生。

いろいろ思い出は尽きないのですが、私が教育以外の書物に目を通し、「人生」ということに強い関心を持つようになったのも、哲学の奥義にふれる三ツ谷校長の講話に感動したことが動機になっています。その感動が非常に大きかった証拠に、当時放送係をしていた斎藤正宏先生に特別にお願いして、ある日の校長の講話を録音してもらい、そのテープを今でも大切に保管している事実があります。

また、私の教員生活の中で、理科担当の教師の息がびったり合い、毎日が楽しく、しかも大きな成果をあげることができたのも、やはりこの時代であったと思っています。発明工夫での生徒の活動、自然科学の研究による生徒の論文等で、全道でもトップレベルの成績を残したのもこの時でした。

その当時の深堀中学校の理科教育も、大きな成果をあげていましたので、私たちは深堀中学校を良い意味でのライバルに仕立て、深堀中学校の理科に負けるなど奮起したものでした。

今でも、当時五稜中学校で理科を担当していた糸川俊郎先生、米田忠夫先生と私の三人がしばしば集まっては、過去の良き日を振り返るとともに、これからの理科教育の指導法について熱っぽく語り合っています。

当時の五稜中学校は、学習面においても、体育面においても、函館市では最高の実績をあげていましたので、私はその時期に五稜中学校の所属職員であったことを、生涯誇りに思って過ごすことでしよう。

“成 長”

荻 原 ハ ル

五稜中学校が二十周年を迎えると聞いて、あの若い学校がもうそんなに、と感慨もひとしおです。

私は昭和三十八年から四十六年まで体育教師として勤務しましたが、五稜中学校ほど期待されて出来た学校も函館市でもそう多くはなかったでしょうし、その期待に応えて華々しい活躍を創立当時から繰り広げた学校も少なかったのではないでしょう。収容すべき生徒数の増加という点では今日の中学校とその設立の趣旨は同じであっても、当時の東部の発展をそのままに受けたバイタリティが学校には満ち溢れていたものです。

当時の五稜中学校はまず全市でも珍しかった「プール」で知られました。中学校では函館市で最初であり、それは長いこと続きました。生徒たちは他の学校から大層羨ましがられたものでした。先生方もプール管理には随分苦労しましたが、市内中学校で唯一のプールということで張り切っていました。そして「陸上競技」、熱心にコーチしてくれた先生、それに応えた生徒ということで、たちまち陸上の王者「五稜」を築き上げました。全道的にも注目された選手も数多く出ました。そんな

中で私は、体操部を指導したのですが、よい部員に恵まれて全市中体連に四回優勝することが出来ました。当時は現在のような全道大会がまだ行われていなかったのが、残念な気もしています。

私はPTAの「母の会」の運営にお手伝いをすることになり、当時会長だった畑露子さんはじめ多くのお母様方と接しましたが、皆さんの人格、識見など数多くの教えをいただき、大変勉強になりました。全員が会員で活動するという学校としてはあまり他に例を見ない組織だと思いますが、現在でも続いているとのこと。今でも当時のお母様方との交流は楽しい思い出になっています。

四十六年に五稜中学校から転勤後一年で教職を退いた私の教員生活は、五稜が中心で五稜で終わったという感じを強く持っています。今でも、街で五稜の卒業生からよく言葉をかけられます。立派に成長した姿を見て、五稜中学校が社会的にも数多くの人材を送っていることを実感して大変嬉しく思っています。五稜中学校の今後の発展を心から祈っています。

寸感

懷古

谷 口 幸 一

「思い出」それが苦しかったことでも、辛かったことでも、時がたつにつれて懐かしく、むしろ楽しかったことのように心に甦ってくるものらしい。苦しかったことや辛かったことなどは、間もなく忘れさってしまうところに人間としての救いがあり、努力の積み重ねということが期待されるのではないだろうか。開校二十周年！人生でいえばちょうど成人式です。この間に母校を飛び立った数多くの雛鳥は、大空にはばたいて、母校の思い出を胸一杯に大きく成長して、各地で活躍していることでしょう。

最後の授業

室 富 夫

今年の三月二十三日第六教時、一年B組の音楽の授業、それは四十年間の教員生活の総決算でした。あの時の生徒達一人ひとりの輝いた瞳を永久に忘れられないでしょう。「教師にとって、授業だけがすべてであり、それ以外は枝葉である」と考えてきました。五稜中学校の思い出といっても、授業中の生徒の顔ばかり頭の中に浮かんできます。まずかった授業の反省と共に 最後の四年間、授業と好きな図書館の仕事だけを

心ゆくまで楽しませてくださった、五稜中学校の先生方に深く感謝しております。

思い出の頁

川 原 エイ子

日ざしが強くなるとプールは煌めく。その煌めきは子供達の歓声や肢体でかき消される。風の戦ぎも弾ね返してしまう若い声。水泳大会は種目別に選手をきめるまでが大変だった。

冬、雪で白くなった廊下を掃く日が続く学校にいた私にとって、初めての夏は鮮かだ。

百足競争で汗を流した運動会。あちこちの教室でリコーダーの音色が響き始めるともう秋。ミニオペレッタ？で笑い転げた文化祭。

思い出の頁は四季さまざまの色彩で溢れている。多くの人々との交流はその頁を一層濃くし、私の人生の大切な部分に加わる。

回想

小 林 一 美

開校二十年の成人の時を迎えられるに当たり、ますます健実な歩みを続けておられることをお喜び申し上げます。四十八年四月に恐る恐る赴任した私ですが、当時の先生方が心やさしく迎えてくれた事を思い出されます。五年間の在勤中、屈託のない気さくな教職員の皆様と父母の方々にお世話になり、これといった事もできず時を過ごした想いです。むしろ、この間、人生の機微にふれ、人間関係の複雑さとむずかしさなど数多く

の事を教えていただいた事を本当に心から感謝いたしております。未来に輝く五稜中学校を祝福してやみません。

九年間の思い出

泉 良子

五稜中での九年間を思う時、実に様々な光景がよぎります。転動当時は創立以来の先生がほとんどで、築きあげてきたという氣力に満ちあふれていました。

はじめての夏、連日プールには沢山の生徒が押しかけ、元気な歓声と水しぶきに圧倒される思いでした。さすが泳ぎの達者な先生が多く、なかでも梶原校長先生や村上教頭先生のお姿はいつもプールに見かけられ、私も生徒と一緒に手とり足とり、教えていただきました。そのかいあって夢中で過ごしたその夏には、なんとかクロールらしきものが出来るようになり、以来九年間、五稜のプールとも親しんでこれたわけです。

その春、生徒と共に植樹した白樺の苗木も、今では三階の校舎までもとどきそうな勢いで成長し、仰ぎみれば、木々の緑が、風にそよぎ、キラキラと太陽の光に映え、五稜中の発展をみる思いがして、とても印象的でした。

懐しい五稜中学校

佐々木 雄 幸

昭和四十五年（五十三）年まで九年間在勤致しましたが、始めての鉄筋コンクリート建校舎の勤務でした。夏休みのプール当番や反響の良すぎ

る体育館でのクラブ指導、ＬＳ教室の建築など、他の学校では経験できない懐しい思い出が多々あります。なかでも田嶋先生より引継いだ放送研の関係で昭和五十三年度全道放送教育研究大会の事務局を担当し、毎日歩いて多くの先生方にご迷惑をおかけしたことは終生忘れることができないでしょう。良き先輩と仲間にもまれ、生徒と楽しく暮した九年間でした。

二十周年をお祝いして

岡 本 守

昭和四十年四月から十年間の在職期間、それは夢中で過ごした年月でした。

立派な校長に仕え、良き先輩、同僚、生徒に恵まれた生活、道徳の研究授業、プール指導、運動会、中体連陸上での総合優勝……。どれ一つとして忘れられない思い出。今、教職を離れ社会教育の道を歩んでいる私の心の奥に深くきざまれています。本当に楽しく、張りのあった生活。感謝しています。

二十歳の誕生と今後のますますのご発展を心からお祈り申し上げます。

躍進する五稜

金 田 豊 秀

記念誌、「十年のあゆみ」を、村上（現校長）、三十刈、永谷、斎藤の先生方と編集した日のことが、つい昨日のように思われます。

道徳教育、放送教育と続いた全道の研究大会。一方、中体連の各種大

会での目ざましい活躍。国語の授業研究では、よく、本堂先生がこう言われたものでした。

「五稜だからできるのですよ。」

新興の地に、躍進する五稜——それが、十年間を五稜中学校で過ごした私の、今も変わらぬ五稜のイメージです。

五稜を憶う

毛間内 茂 二

開校二十周年を迎えられおめでとうございます。ご縁がありまして、昭和四十九年春から五十六年春までの七年間勤務いたしました。その間、研究熱心な素晴らしい先生方の中で多くのことを教えられ感謝しています。五稜には創立以来培われてきたものが沢山ありますがスペースがないので省略します。人生において大事なことは立派な人と出会うことだと言われますが、私は生徒、先生方、父母の方々と出会いが嬉しく思っています。今後の発展を祈念します。

五稜中学校の思い出

春 田 むつゑ

創立二十周年おめでとうございます。

八年前宇賀小学校から一抹の不安と希望を胸に五稜中学校に参りました。その不安もある一日、機械に弱い私に、ユーモアを交えながら何気ないやり方で一人の先生が手伝ってくれました。その時の先生の暖かいやさしさに、いつの間にか消え去り、四月の忙しさもあり一掃、それか

ら六年、早くもすぎ去りました。今ふりかえってみて、私が楽しく勤められましたのもその時の先生、職員の皆様の暖かい協力のおかげと改めて感じています。

サッカー部創設のころ

笠 島 寿 泰

赴任した四十二年頃は、サッカー熱の盛んな頃で、五稜にもサッカー部が創設された年でした。素人監督の私は、福寿顧問の指導のもとで、夏休みには遠路、的場中学校へでかけ、生徒とともに汗を流したものです。三年後にやっと上位入賞を果たし、自分なりに安堵したものです。しかし、当時の五稜は、優勝しなければ相手にされず、万事がこの調子でしたから、この厳しさの中での生活は、圧倒されっぱなしの毎日でした。

吹奏楽部設立に思う

村 田 倅 子

“吹奏楽クラブをつくって”の生徒の熱心な気持ちに動かされ、予算を検討して頂きながら五年かかって何とかそれらしい編成になった。

毎年の文化祭器楽発表の中に、二つ三つと新しい楽器が加えられ、私も生徒も殆んど素人な故の悩みがついてまわった。成人した教え子の協力もあり、朝・昼・放課後と時間をみつけての練習がつづいた。声をつぶし耳鼻科に通ったのも思い出の一つである。毎年のすばらしい演奏を聞くたびに、あの頃の思いがよみがえる。

想うときは

進 士 継 昭

私はいま秋、こんぶの香りのする風を快よく感じています。はるか北東に見える太平洋を眺めていると、穏やかな紺碧の海は心を平靜にしてくれ、想いをめぐらせる時です。

峠を越して、私の立つ丘になま暖かい南西の風が吹くと、ああ向うが函館だと思えます。

その時は五稜郭を脳裏に浮かべます。私は想像力が豊かなのでしょうか。ほんのちょっとした時間ですが、七年間に出会った人々の顔が浮かびます。四郎さんは尊敬、大介は将来、淑子は独創、人と言葉・教室が重複した映像になり、夢のような創造の世界が広がります。

遠い昔

斎 藤 正 宏

なぜだったのか。運動会だといってあの放送室で朝を迎えたのは。どうしてなんだ。中体連だといって怒声をはりあげたのは。他にすぐれた才能もない。体力もない。一日ぐらいいと怠け心が出るのも、ふつうの人間だから仕方がない。でも、『コツコツやろう』という気持ちを育ててくれたのはあの時の空気。

行事があると、宿直室に泊りこんだ人がいたよ。美術室にもいたっけ。

朝早くかけつけた人もあったナァー。結果より取り組む姿勢の大切さを、先輩諸氏が示して下さい下さったのは遠い昔。お元気でしょうか。



二十年のあゆみ

年 月 日	事 項
昭和三七・四・一	函館市立大川中学校田家分教場として発足。 大川中、三学級、中央中、四学級。
四・六	第一回入学式（男子一六七名、女子一三七名 計三〇四名） （一年生だけの学級） 父母と先生の会発足。 生徒会発足。初代会長渡利三郎君。 （他校にひけをとらないように） 新校舎建設地鎮祭。 （やっと本拠のめどがついた） 大川中三学級を中央中学校舎に収容。 （別居生活に終止符） 校舎 一期工事着工。 （僕らの学校が出来るぞ） 母の会結成。初代会長及川キリ氏。 第一回運動会五稜郭公園で挙行。 （雨にたたられました。生徒が出席すると観覧 席は父兄だけ） 第一期工事検定（教室一四、放送室、保健室） 新校舎へ移転完了 新校舎移転式並びに第一回文化祭。
一一・二五	
一二・一九	
一二・二一	

年 月 日	事 項
昭和三七・三・六	校章制定。五稜郭を形どり、花で文化、蕾で若い力を表現。
四・一	校名「函館市立五稜中学校」と決定。 初代校長沼山吉之助氏。
四・二	独立開校式挙行
一一・二六	体育館第一期工事検定
昭和三八・三・二七	第二期工事検定。（教室四、職員室、校長室、事務室、宿直室、用務員室、相談室、教材室二、職員便所） 第三回入学式。 （これで全学年がそろいました） 校歌、校旗制定。 第三期工事検定。（理科室、家庭料室、暗室、展示室、ミシン準備室、付属廊下） 第一回卒業式挙行。（男子一六二名、女子一四八名 計三一〇名） （不自由にめげず頑張りました） 同窓会結成。初代会長藤田真司君。 第四期検定。（技術室、水洗便所） 第二回卒業式。（男子一九二名 女子一三八名 計三三〇名）
昭和四〇・三・一五	
一一・二八	
" "	
" "	
昭和三九・三・一〇	
一一・二四	
一〇・一〇	
四・六	

年 月 日	事 項
昭和四〇・三・三一	初代校長沼山吉之助氏退職。 (新設校、本当にご苦勞様でした)
四・一	藤川光夫校長、深堀中から着任。
八・七	健康保健委員会結成。
九・八	女子生徒の標準服制定。
	(他校に見られない斬新なスタイル)
一二・一	第五期工事検定(美術室、音楽室、水洗便所)
昭和四一・三・一五	第三回卒業式。(男子一三八名 女子一三九名 計二七七名)
四・一	みどり学園中学部二学級、的場中から移管。 函館市道徳指定校委嘱。昭和四三年まで。
七・二七	プール完工 (ライトブルーに映える美しいプール。さあ、 水しぶきをあげて)
一〇・五	北海道道徳研究大会。
昭和四二・三・一五	第四回卒業式(男子一六三名、女子一四三名 計三〇六名)
三・二四	開校日を地鎮祭の六月十七日と決定。
五・二五	藤川光夫校長、道教委学校教育課長に転出。 (五稜中に新風を吹きこんでくれました)
六・二	三ツ谷毅一校長、市教育課長から着任)
一〇・一一	北海道道徳研究大会
一〇・三〇	函館市道徳研究指定校発表。
昭和四三・一・二三	体育館増築工事検定。
四・一	学校放送研究校委嘱。昭和四五年まで。

年 月 日	事 項
昭和四三・三・一五	第五回卒業式(男子一六三名 女子一二四名 計二七七名)
七・二二	温室完成(母の会寄贈)
八・一九	テレビ教育始まる。
一〇・一一	(テレビには一〇チャンネルもあったんだな) 三ツ谷毅一校長、市教育長に転出。 (修学旅行で生徒にお茶のサービスもしてくれ ました。温かい先生でした。写真参照)
一〇・一九	第八回道南放送研究大会。
一一・一	梶原四郎校長、船見中から着任。
昭和四四・三・一五	第六回卒業式(男子一四四名、女子一三四名 計二七八名)
一〇・八	第二二回放送研究大会北海道大会。
昭和四五・三・一四	第七回卒業式(男子一五八名 女子一二八名 計二八六名)
昭和四六・三・一五	第八回卒業式(男子一三四名 女子一二四名 計二五八名)
一〇・一六	開校十周年記念式典。
昭和四七・七・八	P T A臨時総会(規約改正について)
七	体育館女子更衣室設置。
一〇・三	全道病弱・虚弱教育研究大会(みどり学園)
一〇・八	P T A体力テスト。
昭和四八・三・一五	第一〇回卒業式
一二・一	函館・亀田市合併、生徒交歓会。
昭和四九・三・一五	第一一回卒業式

昭和四九・	五・一五	母の会総会。
	五・二八	留萌港南中学校との交歓会。
	七・八	新机・椅子入荷。
	七・一二	武蔵野音楽大学生による演奏会。
	八・二七	母の会工業高等専門学校見学。
昭和五〇・	三・一五	第一二回卒業式。
	七・一六	プール防犯灯・排水口完成。
	八・一一	グラウンド赤土入る。
	九・二三	虻田PTA本校視察。
	一〇・二三	母の会研修旅行(濁川)
	一二・一七	みどり学園校舎落成。
昭和五一・	三・一五	第一三回卒業式。
	九・一〇	全道理科研究大会(本校会場)
	一〇・三	全道PTA函館大会。
昭和五二・	三・一五	第一四回卒業式。
	四・九	機械警備に伴う校舎管理始まる。
	五・二七	国際電信電話教室開催。
	八・二〇	体育館背面のタキロン修理。
	一一・三〇	優勝旗・盃等陳列ケースPTAより寄贈。
昭和五三・	三・一五	第一五回卒業式。
	九・一八	ＬＬ教室完成。
	一二・七	体育館水銀灯・二間廊下照明設置。
	一二・二一	グラウンド東側フェンス完了。
昭和五四・	三・一五	第一六回卒業式。
	五・二二	みどり学園が道立養護学校となる。
	一二・五	PTA給食試食会

昭和五四・	一二・二五	階段踊り場総サッシ窓となる。
昭和五五・	三・一五	第一七回卒業式。
	三・二〇	凍結防止用赤外線装置取付。
	四・一三	職員による下駄箱づくり始まる。
	五・二一	ケーナ演奏会(アントニオ・バンター氏)
	七・四	新堀ギター演奏会。
	八・一二	全教室黒板塗装。
	一〇・一四	生徒会主催大運動会。
昭和五六・	一・一三	校内チャイム取付(PTA寄贈)
	一・二四	シエル科学コンテスト全国一位。
	三・一四	市P連より優良PTAとして表彰される。
	五・六	第一八回卒業式。
	五・二八	新堀ギター鑑賞会(P文化部)
	六・三	創立二〇周年記念体育大会。
	七・一〇	創立二〇周年記念植樹祭。
	九・二七	P生活部生徒登校状況観察。
	一〇・一	創立二〇周年記念生徒会主催大運動会。
	一〇・一	創立二〇周年記念誌。
	一〇・二	創立二〇周年記念誌特集号発行。
	一〇・九	創立二〇周年記念文化祭。
		創立二〇周年記念祝賀会

歴代の校長

氏名	任命（発令年月日）	退職・転任年月日	退職職
初代校長 沼山 吉之助	三七・四・一	四〇・三・三一	退職
二代 藤川 光夫	四〇・四・一	四二・五・二五	道教委学校教育課長
三代 三ツ谷 毅一	四二・六・一	五三・一〇・一〇	函館市教育長
四代 梶原 四郎	四三・一・一	四八・四・一	深堀中学校長
五代 金沢 正浩	四八・四・一	五二・三・三一	亀田中学校長
六代 齋藤 正之介	五二・四・一	五五・三・三一	退職
現校長 村上 健介	五五・四・一		

旧現職員一覧

氏名	職名	前任校	発令年月日	転退職年月日	転任先
井上 豊教頭	教頭	旭中	三六・四・一	三九・四・一	若松小
西谷富士雄	教諭	潮見中	四五・四・一	四八・四・一	深堀中
阿部 光房	教諭	旭中	四五・二・一〇	四二・四・一	港中
平沼 靖雄	教諭	港中	四五・四・一	四三・四・一	退職
千葉 和衛	教諭	八幡小	四五・四・一	四三・四・一	港中
菅原 昭一	教諭	愛宕中	三・一・一	一〇・一・一	北高
松井 喜一	教諭	大川中	四五・四・一	四六・四・一	的場中
桜井 恭子	教諭	亀尾小	四五・四・一	四五・四・一	新川中
永谷 嘉一	教諭	木古内中	三六・四・一	四八・四・一	深堀中
柳田 美代	市事務	中央中	四五・四・一	四二・四・一	港中
吉田 ヤエ	養護教諭	高盛小	三九・四・一	四三・四・一	港中
荒谷 ミツ	用務	八幡小	四五・四・一	四三・四・一	退職
沖野 喜久雄	教諭	松風小	四五・四・一	四〇・五・一	港中
堤 勇	教諭	（新任）	一〇・一・一	〃	北高
藤原 孝一	教諭	中央中	四五・四・一	四六・四・一	的場中
野々村 正晴	教諭	的場中	四五・四・一	四五・四・一	新川中

三七・四・一	石塚 孝成	教諭	大川中	四〇・四・一	木古内 一
〃	窪田 暉子	〃	新川中	四三・四・一	千代小
〃	笠井 敬一	〃	中島小	三九・四・一	新川中
〃	成田 恭子	〃	松風小	四七・四・一	谷地頭小
三七・五・一	小川 智博	用務	(新任)	四〇・三・三一	東 高
三八・三・一	杉村 つや	〃	幸小	三九・三・五	松川中
三八・四・一	庄司 三郎	教諭	谷地頭小	四四・七・一	千代ヶ
〃	安井 孝	教諭	(新任)	四四・四・一	八雲中
〃	門脇 初代	〃	松川中	四九・三・三一	桐花中
〃	広沢 博正	〃	潮見中	四二・四・一	潮見中
〃	金田 豊秀	〃	船見中	四八・四・一	港 中
〃	坂牧 達夫	〃	中央中	四二・三・一	江差小
〃	竹内 巖太郎	〃	愛宕中	四六・四・一	湯川中
〃	荻原 ハル	〃	船見中	四六・四・一	愛宕中
〃	永井 太郎	〃	的場中	四七・四・一	新川中
〃	土門 厚	〃	的場中	四一・四・一	知内中
〃	三十刈 智一	〃	大川中	四七・四・一	松川中
三八・五・一六	奥寺 明	道事務職	(新任)	四一・四・一	渡島地方 教育局
三八・四・一	蘇馬 辰郎	教諭	大川中	四七・四・一	光成中
三八・一・二五	日野口 一男	用務	愛宕中	四四・六・三〇	柏野小
三九・三・五	大畑金三郎 (旧姓岩崎)	〃	〃	四〇・一・三	退 職
三九・四・一	武石 光正	教諭	柏野小	四〇・四・一	新川中

三九・四・一	桑川 俊郎	〃	潮見中	四七・四・一	福島中
〃	斎藤 正宏	〃	(新任)	四八・四・一	松川中
〃	埴山 祥子	養護教諭	(〃)	四四・四・一	鉦路 柏木小
四〇・四・一	佐々 陽	教諭	大川中	四一・四・一	深堀中
〃	岡本 守	〃	港 中	五〇・四・一	新川中
〃	三上 力也	〃	福島小	四五・四・一	日吉小
四〇・五・一	藤崎 孝造	用務	湯川中	四五・四・四	大森小
四一・四・一	望月 年春	みどり 教諭	臼尻中	四四・四・一	新川中
〃	滝村 浩平	教諭	湯川小	四九・三・三一	中央中
〃	福寿末太郎	〃	的場中	四二・四・一	湯川中
〃	渡辺 宏平	みどり 教諭	東川小	四五・四・一	日吉小
〃	勝野 一生	〃	大沼中	四四・四・一	新川小
〃	米田 忠夫	教諭	木古内 第二中	五一・三・三一	港 中
〃	太田 秀雄	教頭	旭 中	四二・四・一	金原小 中校長
〃	主藤 節子	教諭	(新任)	四七・四・一	高盛小
〃	武田 政雄	道事務職	函商高	四六・四・一	深堀中
四二・四・一	蔽下 寛	市事務	(新任)	四三・七・一	東高校
〃	斎藤 正之	教頭	湯川中	四五・四・一	白神小 校長
〃	笠島 寿泰	教諭	松城小	四八・四・一	深堀中
〃	田島 靖彦	〃	桐花中	四七・四・一	市教委 指導主事
〃	保坂 武道	〃	柳法華中	四八・四・一	戸倉中
〃	上杉 宏子	市事務	常盤小	四五・四・一	上湯川小

発令年月日	氏名	職名	前任校	転退職年月日	転任先
四二・一〇・一	金崎 紘一	教諭	(新任)	四八・八・一六	の場中
四三・四・一	本堂 潤悦	教諭	銭亀沢中	五二・三・三一	光成中
四三・五・一	木村 照江	用務	(新任)	五四・三・三一	青柳小
四三・七・五	和田 秀子	市事務	松川中	四六・九・二一	教員研究所
四四・四・一	山田 孝子	養護教諭	湯川小	四九・三・三一	若松小
"	福土 重雄	教諭	松風小	四五・三・三一	港小
"	佐々木 峰生	"	光成中	"	山崎中
"	進士 継昭	教諭	松川中	五一・三・三一	船見中
"	長尾 敬子	教諭	青柳小	四九・三・三一	東川小
四四・七・一	大竹 義勝	夜警	船見中	四六・一〇・一	柏野小
"	熊倉 利典	用務	巴小	四六・四・一	港小
四五・四・一	大福 栄一	教諭	潮見中	五〇・四・一	退職
"	村上 健介	教頭	大川中	四八・四・一	榎法華 中学校長
"	川原 エイ子	教諭	船見中	五三・三・三一	の場中
"	館洞 光宏	"	尻岸内中	"	中央中
"	遠藤 一郎	教諭	深堀中	四九・三・三一	松川中
"	佐々木 雄幸	教諭	余市 豊浜中	五四・三・三一	"
四五・四・七	柳沢 美代	市事務	銭亀沢中	五二・三・三一	日吉丘小
四五・五・一	小西 孝男	教諭	金堀小	五三・三・三一	銭亀沢中
四五・六・一	広沢 博正	教諭	潮見中	五四・三・三一	新川中
四六・四・一	村田 倅子	教諭	旭中	五一・三・三一	退職

発令年月日	氏名	職名	前任校	転退職年月日	転任先
四六・四・一	大平 元昭	教諭	船見中	五四・三・三一	湯川中
"	泉 良子	"	銭亀沢中	五五・三・三一	赤川中
"	高橋 市雄	道事務職	八雲小	五二・三・三一	大森小
四六・四・五	高田 広栄	用務	松風小	五五・三・三一	退職
四六・五・二五	林 俊夫	教諭	船見中	"	湯川中
四六・一〇・一	藤井 光雄	夜警	千代田小	五一・九・一四	退職
"	沢村 佐次郎	用務	駒場小	五五・三・三一	赤川中
四七・四・一	亀松 光美	教諭	旭中	四八・四・一	松川中
"	玉木 忠	"	光成中	五〇・四・一	蛾眉野 小中教頭
"	八反田 稔	"	深堀中	五一・四・一	退職
"	斎藤 美都子	"	新川中	五一・四・一	退職
四七・五・一	杉浦 ミヤ子	市事務	の場中	五四・六・三〇	退職
四八・四・一	小林 一美	教頭	潮見中	五三・三・三一	亀田中 教頭
"	小西 政一	教諭	中島小	四九・三・三一	退職
"	酒田 文雄	"	湯川中	"	
"	井上 貞興	"	愛宕中	五二・三・三一	戸倉中
"	門馬 常	教諭	深堀中	五四・三・三一	養護 五稜郭
"	田中 恒也	教諭	湯川中	"	
"	猪狩 一則	"	港中	"	
四八・七・一六	田堰 早苗	教諭	和志 足利中	五四・三・三一	養護 五稜郭
四八・八・一六	深栖 久佳	教諭	鹿部中	"	

四九・四・一	谷口 幸一	教諭	港中	五四・三・三一	五稜郭
"	島貫 讓	教諭	愛宕中	"	養護
"	毛間内 茂二	"	新川中	五六・三・三一	東光中
"	永田 裕三	"	旭中	五五・三・三一	尾札部中
"	春田むつゑ	養護教諭	東小	"	松川中
五〇・四・一	鹿角 令夫	教諭	中央中	"	"
"	平向 貞重	"	尾白内中	"	"
五一・四・一	長岡 正昭	"	深堀中	"	"
"	阿部 雍朗	"	旭中	"	"
"	長尾 祥子	"	福島中	"	"
"	鈴木 利治	"	(新任)	五六・三・三一	榎法華中
"	伊藤 英実	"	松川中	"	"
五二・四・一	室 富夫	"	湯川中	五六・三・三一	退職
"	板東 忠康	"	教頭	"	"
"	島村 和子	道事務	大森小	"	"
"	小川 安紀子	市事務	的場中	五五・三・三一	千代ヶ台
五三・四・一	辻 俊治	教頭	港中	"	"
"	安井 歳男	教諭	桐花中	"	"
"	大久保 雄治	"	白旗町立 上庶路中	五四・三・三一	港小
五四・四・一	杉谷 宏	"	亀田中	"	"
五五・四・一	竹村 英夫	"	旭中	"	"
"	坂田 法行	"	湯川中	"	"

五五・四・一	大坂 邦子	教諭	的場中	"	"
"	日向 泰子	養護教諭	松前高	"	"
"	中川 英俊	市事務	若松小	"	"
"	小林 勇	用務	的場中	"	"
"	安藤ヤユエ	"	千代田小	"	"
五六・四・一	佐々木 一夫	教諭	亀田中	"	"
"	渡辺 満	"	中央中	"	"
"	石井 寿八	"	臼尻小	"	"
"	石名坂 克明	"	蝦眉野中	"	"
"	小柳 昭治	用務	鍛神小	"	"
"	安栗恵理子	臨事務	"	"	"

父母と先生の会役員

役	職	氏	氏名	役	職	氏	氏名	役	職	氏	氏名
昭和三六年度	会長	鈴木	義浄	昭和四〇年度	副会長	寺下	兼代(母の会会長)	昭和四五年度	副会長	池田	裕泰
	副会長	谷岡	純海	昭和四一年度	会長	笹島	吉平			柴田	裕司
		角田	亮治		副会長	葛城	喜三松			山口シズエ(母の会会長)	
昭和三七年度	会長	又坂	日出生			棚池	神治	昭和四六年度	会長	簡井	義定(七月退任)
	副会長	鈴木	義浄			寺下	兼代(母の会会長)			池田	泰(七月就任)
		谷岡	純海	昭和四二年度	会長	笹島	吉平			柴田	裕司
	副会長	角田	亮治		副会長	葛城	喜三松			国立	亨太郎
昭和三八年度	会長	又坂	日出生			棚池	神治			荒川	定治
	副会長	鈴木	義浄(八月退任)			篠崎津枝子(母の会会長)		昭和四七年度	会長	池田	泰
		又坂	日出生	昭和四三年度	会長	寺下	兼代			今野	汀子(母の会会長)
	副会長	谷岡	純海		副会長	葛城	喜三松			国立	亨太郎
		角田	亮治			荒川	定治			柴田	祐司
昭和三九年度	会長	笹島	吉平(八月就任)			菅原	道雄			荒川	定治
	副会長	宮下	昌三			畑露子(母の会会長)		昭和四八年度	会長	高萩	圭子(母の会会長)
		笹島	吉平	昭和四四年度	会長	菅原	道雄			国立	亨太郎
	副会長	国立	亨太郎		副会長	池田	泰			石畑	克巳
昭和四〇年度	会長	笹島	吉平			村山	貞雄			高萩	賢一
	副会長	石田	政治			荒川	定治			工藤	賢一
		国立	亨太郎	昭和四五年度	会長	山口シズエ(母の会会長)				柴田	和(母の会会長)
	副会長	棚池	神治		副会長	簡井	義定	昭和四九年度	副会長	国立	亨太郎
						野崎	悦郎			石畑	克巳

昭和四九年度	副会長	工藤 猛	昭和五二年度	副会長	十倉 久子	昭和五五年度	副会長	菊地 富男
"	"	今野 汀子	"	"	金浜 松雄	"	"	稲葉 哲子
昭和五〇年度	会長	柴田 和(母の会会長)	昭和五三年度	会長	石畑 克巳	昭和五六年度	会長	福留 陽子
副会長	副会長	工藤 猛	副会長	副会長	菊地 健	副会長	副会長	杉山 博康
"	"	石畑 克巳	"	"	向井 愛子	"	"	阿部 良子
"	"	小原 幸男	"	"	金浜 松雄	"	"	中村 良子
"	"	今野 汀子	"	"	吉村 和子	"	"	幸田 小繁
昭和五一年度	会長	柴田 和(母の会会長)	昭和五四年度	会長	十倉 久子	"	"	真符 啓子
副会長	副会長	石畑 克巳	副会長	副会長	石畑 克巳	"	"	
"	"	小原 幸男	"	"	沢口 俊郎	"	"	
"	"	川野 宗雄	"	"	阿部 良子	"	"	
"	"	金浜 松雄	"	"	山田 光治	"	"	
"	"	吉村 和子	"	"	稲葉 哲子	"	"	
昭和五二年度	会長	石畑 克巳	昭和五五年度	会長	和田 京子	"	"	
副会長	副会長	小原 幸男	副会長	副会長	石畑 克巳	"	"	
"	"	向井 愛子	"	"	杉山 博康	"	"	
"	"	吉村 和子	"	"	阿部 良子	"	"	

学校概観

位 置 函館市田家町 5 番 17 号
(電話 ㊦ 3 4 5 8)

校 地 1 6.6 3 4.6 m^2

校 舎 4,4 0 0.1 2 1 m^2

校 長	教 諭	養 教	事 務	用 務	警 備 員	給 食 婦	計
1	2 2	1	3	3	1	2	3 4

学 年	1	2	3	計
学 級 数	5	5	5	1 5
在 籍 数	1 9 8	1 8 9	1 8 1	5 6 8

56. 10. 1 現在

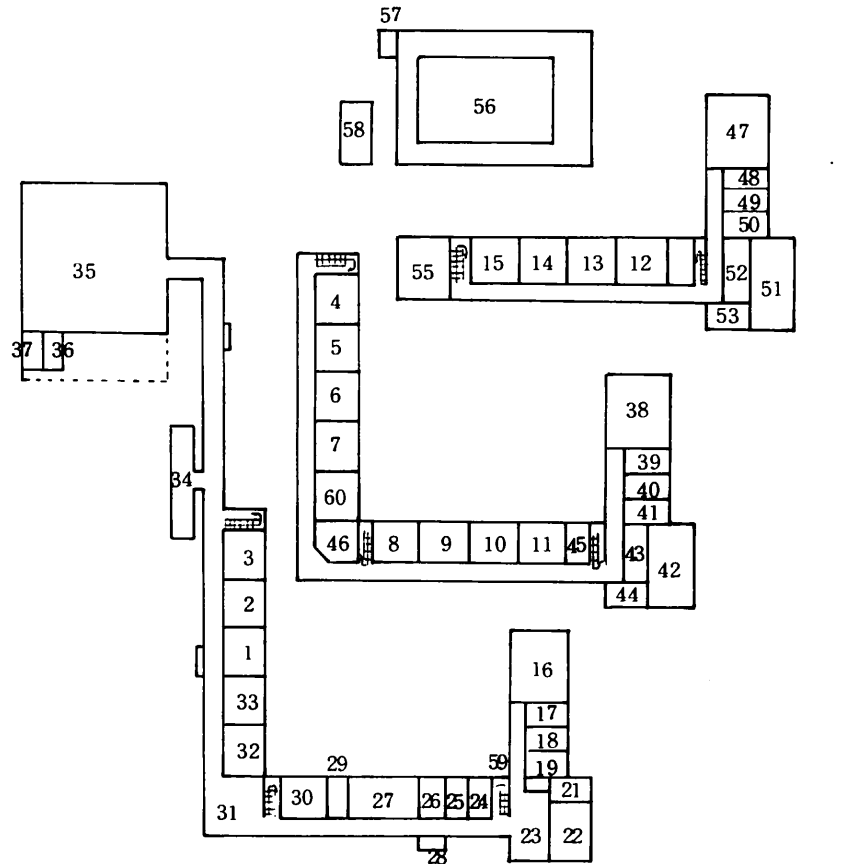
各学年度学級教・生徒数・卒業生数

()内はみどりを含む。
5 4 年度道立へ移管

年 度	学 級 数	生 徒 数
3 6	7	3 0 4
3 7	1 2	6 1 7
3 8	1 9	8 9 9
3 9	1 9	8 8 5
4 0	1 9	8 3 4
4 1	1 9 (2 1)	8 4 3 (8 6 5)
4 2	1 9 (2 1)	8 1 8 (8 4 1)
4 3	1 9 (2 1)	8 1 7 (8 3 5)
4 4	1 9 (2 2)	7 8 5 (8 1 9)
4 5	1 8 (2 1)	7 4 1 (7 7 2)
4 6	1 7 (2 0)	6 9 9 (7 2 8)
4 7	1 6 (1 9)	6 6 4 (7 0 0)
4 8	1 5 (1 9)	6 6 2 (7 0 5)
4 9	1 5 (1 8)	6 2 1 (6 5 4)
5 0	1 5 (1 8)	6 2 9 (6 5 5)
5 1	1 5 (1 8)	6 3 5 (6 6 2)
5 2	1 5 (1 8)	6 2 8 (6 6 0)
5 3	1 5 (1 8)	5 9 8 (6 2 4)
5 4	1 4	5 7 0
5 5	1 5	6 0 0
5 6	1 5	5 6 8

卒 業 生 数		
男 子	女 子	合 計
1 6 2	1 4 8	3 1 0
1 9 2	1 3 8	3 3 0
1 3 8	1 3 9	2 7 7
1 5 9 (1 6 3)	1 3 9 (1 4 3)	2 9 8 (3 0 6)
1 5 8 (1 6 3)	1 0 9 (1 1 4)	2 6 7 (2 7 7)
1 4 2 (1 4 4)	1 2 8 (1 3 4)	2 7 0 (2 7 8)
1 5 5 (1 5 8)	1 2 4 (1 2 8)	2 7 9 (2 8 6)
1 3 1 (1 3 4)	1 1 7 (1 2 4)	2 4 8 (2 5 8)
1 3 2 (1 3 4)	1 0 5 (1 1 2)	2 3 7 (2 4 6)
1 2 4 (1 2 6)	1 1 1 (1 1 7)	2 3 5 (2 4 3)
1 2 5 (1 2 8)	9 3 (9 9)	2 1 8 (2 2 7)
9 3 (1 0 2)	9 0 (9 7)	1 8 3 (1 9 9)
1 0 9 (1 1 3)	9 5 (9 8)	2 0 4 (2 1 1)
1 2 5 (1 2 9)	8 8 (9 2)	2 1 3 (2 2 1)
1 0 2 (1 0 8)	8 9 (9 5)	1 9 1 (2 0 3)
1 1 8 (1 2 3)	8 3 (9 0)	2 0 1 (2 1 3)
9 6	8 3	1 7 9
1 0 6	9 2	1 9 8
7 7	1 0 4	1 8 1 (予 定)

校内平面図



1～15	普通学級	29	放送室	47	音楽室
16	技術室	30	保健室	48	同準備室
17	同準備室	32	給食準備室	51	家庭科室
18・19・34・40・41		33	柔道場（更衣室）	52	家庭科室
49・50	生徒用便所	35	体育館	53	同準備室
20	物置	36・37	生徒用更衣室	54	生徒会室
21	会議室	38	美術室	55	図書室
22	用務員室	39	同準備室	56	プール
23・31	生徒用玄関	42	理科室	57	機械室
24	脱套室	43	同展示室	58	管理室・更衣室
25	校長室	44	同準備室	59	職員用便所
26	事務室	45	相談室	60	LL教室
27	職員室	46	教材室		

現職員

職名	氏名	着任年月日	教科	学年	分掌	クラブ
校長	村上 健介	五五・四・一	国		総務	
教頭	辻 俊治	五三・四・一	数		施設	将棋
教諭	酒田 文雄	四八・四・一	数	2	文芸	園芸
	島 貫 譲	四九・四・一	国	2	文芸	園芸
	長岡 正昭	五一・四・一	数音	1	渉外	ゲーム
	安井 歳男	五三・四・一	技	2	漫画	
	佐々木 一夫	五六・四・一	国体	3	将棋	
	田中 恒也	四八・四・一	理	2	テニス	
	阿部 雅朗	五一・四・一	英	2	将棋	
	竹村 英夫	五五・四・一	理	1	生徒	
	杉谷 宏	五四・四・一	社	1	生徒	
	八反田 稔	四七・四・一	理	3	生徒	
	鹿角 令夫	五〇・四・一	体	3	健康	工夫工作
	渡辺 満	五六・四・一	社習	3	卓球	マラソン
	坂田 法行	五五・四・一	音	3	文化	卓球
	伊藤 英実	五一・四・一	美	1	生徒	吹奏楽
	板東 忠康	五二・四・一	国	1	図書	読書
	猪狩 一則	四八・四・一	英	3	生徒	地球科学
	平向 貞重	五〇・四・一	理	1	地球科学	

職名	氏名	着任年月日	教科	学年	分掌	クラブ
教諭	深栖 久佳	四八・八・一六	数	3	教務	庭球
	石井 寿八	五六・四・一	体	1	健康	ソフトボール
	石名坂 克明	五六・四・一	英	2	生徒	英語
	大坂 邦子	五五・四・一	体	2	健康	手芸
	長尾 祥子	五一・四・一	家	3	図書	
養教	日向 泰子	五五・四・一	健康	2	健康	
事務	島村 和子	五二・四・一	庶務		庶務	
	中川 英俊	五五・四・一	庶務		庶務	
	寺田 博	五六・六・二七	庶務		庶務	
	安栗 恵理子	五六・四・一	庶務		庶務	
用務	小林 勇	五五・四・一	施設		施設	
	小柳 昭治	五六・四・一	施設		施設	
	安藤 ヤユエ	五五・四・一	施設		施設	
給食	早崎 石子	四八・四・六	給食		給食	
パート直	熊谷 トシ	五三・五・一	給食		給食	
	原田 岩雄	五四・二・三二	日直		日直	

あとがき

昭和三十六年大川中学校の田家分校として発足以来二十年。この期間に校下の環境は大きく変貌しました。二学期の忙しい中での記念誌の編集ということで夜遅くまでがんばった。

しかしながら、二十年間の伝統ある本校の姿を浮きぼりにしながら現在の真の姿を載せたいという願望は結局のところ満足できなかったようです。各方面に原稿執筆のお願いを致しましたところ心よくお引き受け下され期日までにお届けいただきましたこと深く感謝致しております。特に第三代校長三ツ谷毅一先生（現市教育長）には激務の中筆をお執りいただき一同感謝の念でいっぱいです。

この機会にいろいろと載せたかったのですが、紙面の関係上割愛せざるを得ませんでした。二十周年という一つのけじめにこの誌を出すことの意

義としてこれが五稜中益々の発展の礎となれば編集子一同喜びに耐えません。

〈編集子一同〉

発行 昭和五十六年十月一日

編集 函館市立五稜中学校